

『新千歳市史』編さんだより

志古津

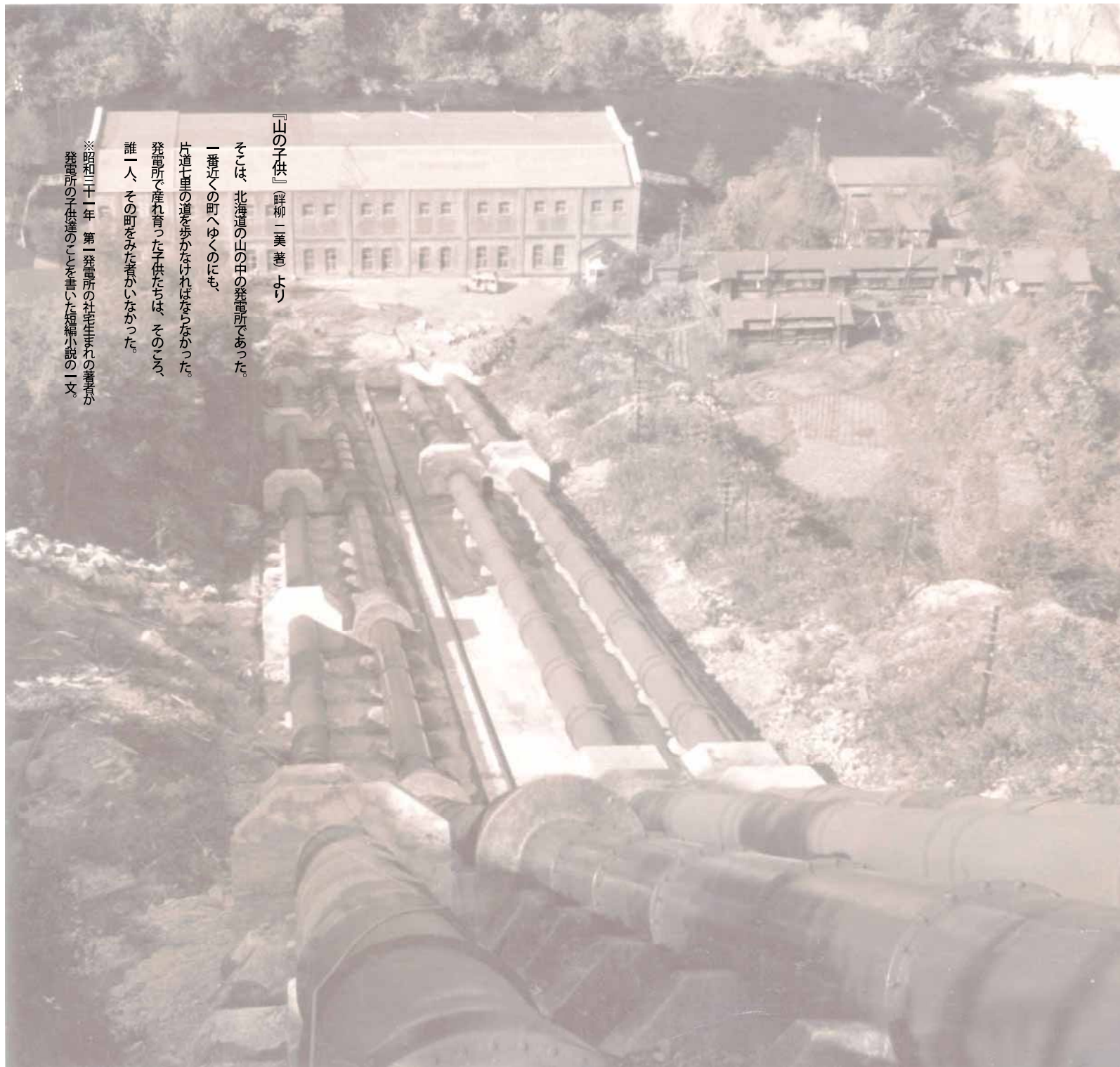
過去からのメッセージ

Message From the past

HOKKAIDO
CHITOSE-CITY



第9号 平成21年3月



『山の子供』 野柳 三美 著より

そこは、北海道の山の中の発電所であった。

一番近くの町へゆくのに、

片道七里の道を歩かなければならなかった。

発電所で産れ育った子供たちは、そのころ、

誰一人、その町をみた者がいなかった。

※昭和三十一年 第一発電所の社宅生まれの著者が
発電所の子供達のことを書いた短編小説の一文。



干拓前の長都沼

千歳と長沼の境界に、かつて長都沼という広大な沼地と湿原が広がり、そこには多くの野鳥や魚たちが生息していた。

干拓によって沼が無くなってからも、忘れずに飛来する渡り鳥たちがいる。

表紙の写真（大）は、明治43年、王子製紙千歳第一発電所の第一期工事が完成した頃。工事関係者の社宅も見られる。
写真（小）は、青葉公園の陸上競技場や野球場が完成した昭和30年代初期の空撮。

志古津 9号

目次

千歳第四発電所での暮らし	林 嘉男	1
千歳の大規模遺跡調査と世界遺産登録	畑 宏明	7
青葉公園は市民の宝	今野 善行	11
こんな場所に六三〇〇年前の集落があった	西田 茂	15
秦一明と二〇年と二代目戸長の人物像を求めて	東川 孝	21
シコツと千歳の地名解	西田 秀子	27
あとがき		

千歳第四発電所での暮らし

林 嘉 男

恵庭市議会議員

産婆さんのこと

一九四六年八月十日に私は千歳川上流にある第四発電所で生まれました。太平洋戦争に負けた翌年のことでした。その日、私他には第三発電所で大西篤くんが生まれています。当時、産婆さんは千歳市内の井上さんという方が来ていたそうです。篤くんは深夜に生まれ、私は明け方に生まれたそうですから、産婆さんは一睡もせずに二人の男の子を取り上げたと思われます。当時、第四発電所には一〇世帯が住む社宅がありました。一棟二戸長屋が五軒で発電所の川沿いの土手の上にあります。

戦後まもなく出産が多かったことから、産婆さんも大忙しでした。特に、冬場は馬糞そりに乗って千歳から発電所まで駆けつけなければならず、急いでわだちを踏み外してひっくり返り、なかの炭火で足をやけどしたこともあったと聞いています。

発電所は千歳川沿いに第一から第五まであって、そこで働く従業員の子どもが五〇人ほどいましたから出産は産婆さんと隣近所の奥さんたちが手伝って、そこにはいくつものドラマがあったと聞いています。

熊のこと

この世の中で一番恐ろしいことは「地震・雷・火事・オヤジ」と聞いていました。私は大きくなってからも「オヤジ」のことを「熊」だと思っていました。春と秋には、熊が民家近くに出没することが多くて、出会った

人も多くいました。昭和二十九年九月二十七日、一五号台風の翌朝、倒木で道がふさがれ、バスが不通になり、徒歩で集団登校している時に熊に遭遇しました。子連れの熊は、四〇〇メートル前方にいました。一〇人ほどいた子どもたちは、声を出して泣きました。通りかかったそまふ杣夫が、私たちを引率して熊が通り過ぎるのを待って無事でした。熊の被害にあった話は、冬の大人たちの夜話でよく聞かれました。子どもの頃から、山で遊び、川で魚とりをする機会がたくさんありましたが、熊のことが頭から離れたことはありません。

山の小学校

水明小・中学校に入学したのは、昭和二十七年のことです。そのころは、軽便鉄道が既に廃止されて第四発電所から苦小牧までバスが運行されていました。朝七時三十分頃にバスが第四発電所の「山の上」から出発し、三十分ほどで第一発電所にある水溜みずためにある学校に到着するという毎日でした。入学当時は複式学級で一年生と四年生、二年生と五年生、三年生と六年生が同じ教室の中で一人の先生に授業を受けていました。音楽の時間、私が大きな声で独唱すると背中合わせに授業を受けていた姉が「ばかみ



写真-1 山の子どもたちと七夕祭り

たいな大きな声で歌わないで」と休み時間中に頭を叩かれたこともありま
す。今では、考えられないことですけれども、算数の時間、私が先生に答
えを迫られると、背中合わせの姉が答えを言っつてしまい、二人とも廊下で
立たされたということもあります。

「山の学校」のユニークなところは、秋には学校で冬場使うマキスト
アの柴拾いに半日出掛けて、その間、先生が山の中で歌をうたったり、国
語の文章の暗唱なんかをさせられることです。苺つみや、炊事遠足などの
課外授業が多く、今もそのことが懐かしく思い出されます。冬は、三〇〇
坪ほどある屋外グラウンドに放水してスケートリンクをつくり、スケートを
楽しみました。先生は、小学校のそばの教員住宅に住んでいて、発電所の
従業員と一緒に所内の行事に参加し、先生と父兄の絆がしっかりし
ていたように思います。

当時、藤の沢（第四発電所と第三発電所の中間にあつた）にも子どもた
ちがいて、水明小・中学校に通うことになりました。藤の沢の子どもたち
は弁当を食べるときに、惣菜を手で隠して食べる子もいたりして、教室全
員の子が弁当を手で隠して食べるようになりました。昼になる一時間くら
い前から教室の窓際にあるストープの上にアルマイトの弁当を置いて温め、
熱くてやけどをした記憶があります。その頃の弁当の惣菜は、梅干と佃煮
と卵焼きがあれば良いほうでした。

発電所のこと

昭和十五年十一月、私の父は第四発電所の従業員として採用され、同三
十五年恵庭発電所に転勤するまでの間二〇年間、家族とともに、山で発電
所生活をしました。父は、私が小学四年生の夏、発電所で鉄柱を担ぎ、四
万ボルトの裸線に吸い寄せられるという事故に遭いました。四万ボルトの

電流が、どんなものなのか私にはすぐには飲み込めませんでした。病院
に運ばれた父の右肩から右手に電流が抜けた大きな穴を見たときに、電流
の恐ろしさを知らされました。父は奇跡的に助かり二カ月間で退院しまし
た。電流事故や堰堤での作業事故は幾度かあつて、危険を伴う仕事でした。
その後、毎朝、神棚に手を合わせ、ゴム手袋とゴム長靴を履く父の姿を見
ながら、事故のない毎日がいかに大切かということを知りました。

発電所の人びと

第四発電所のすぐ下流に国営のさけ・ますふ化場がありました。師走に
入ると孵化場の職員の人々がホツチャレと言つて産卵後の鮭を持参してくれ
たことがありました。鮭はふ化場の周辺に秋口になると川が真つ黒くなる
ほど遡つてきて、産卵し、よく鮭の群れの中に棒を立てても倒れないとい
う話がありました。そのくらい群れた鮭が遡ってきたものです。父は、
青年時代からラジオを作ることを得意としていたので、藤の沢に住んでい
る人たちがラジオの修理を頼みによく家に来ていました。

小学五年生の時に火事がありました。二軒隣の社宅から出火して木造長
屋は瞬くまに燃え上がりました。消火設備の無かつた当時は、川から手押
しポンプで放水したあとは、社宅の周りにあつた洗濯用の共同井戸の水で、
大人も子どもも一緒になつて消火にあたりました。夜だったので、炎は大
きく空までのぼり、二軒隣の第三発電所からも見えたということです。第
三発電所の従業員が数名、走つて加勢に来た時、大きな拍手があつたの
を今も覚えています。

発電所のメインイベントは夏の小学校運動会と冬のスキー大会でした。
大人から子どもまで総出で、数日前から準備をし、大会を盛り上げていま
した。運動会は大人の競技もあつて、小学校の運動会と言つよりは、村内



写真-2 発電所の人びとと山の大運動会

したことを覚えています。

山の音・川の音

生まれてから十三歳まで川の音を聞きながら育ちました。都会に住むようになって車の騒音で眠れぬ日、川の音の入ったCDを聞きながら眠ることが最近、ずいぶんと多くなりました。山の音もそうです。小鳥のさえずり、夕暮れ時になくカラスの鳴き声、ヤマガラやウソなどのさえずりもいまでも鮮明に覚えています。今思ふことですが、あの広大で厳寒の自然環境の中で育ったことが私の最大の自慢です。

の交流行事でお祭りのような賑わいでした。

買ひ物は、千歳よりも苦小牧が多く、王子製紙が経営する苦小牧の配給所で日用品や雑貨を買ったため、土曜日や日曜日は、家族連れで買出しをしたものです。

父は、千歳や恵庭に知り合いが多かったため、夏場は、私を自転車の荷台にのせて、よく千歳や恵庭に買ひ物に連れて行ってくれました。千歳の古谷呉服店の店内の広さと品数の多さにびっくり

千歳発電所のおいたち（主なる出来ごと）
「千歳発電所ふるさと会」が編さんしたもの。表記等、一部修正を加えた。

43	43	43	42	42	41	41	41	40	40	39	38	37	37	36	27	27	18	7	4	明治2
・7	・6	・4	・5	・9	・7	・6	・7	・9	・5	・6	・3	・10	・38	・9	・28	・3	・3	・2	・12	4
・31	・17	・18	・15	・17	・15	・12	・20	・6	・26	・10	・26	・10	・10	・10	・26	・8	・26	・8	・20	20
<p>千歳郡・烏柵舞村として誕生 樽前山大噴火・樽前（現苦小牧市）地方火山灰二五〇を記録 樽前山大噴火（その他の記録なし） 右に同じ（ " " ） 支笏湖に姫鱒養殖の仮ふ化場出来る 日清戦争 鈴木梅四郎専務一行、支笏湖周辺・苦小牧地方視察 日露戦争 支笏湖地域に於ける一切の水利権願い道庁を提出 （明治三十八年四月十五日許可） 千歳川カマソウの滝付近（現在の第二発電所付近）に水力工場新設を道庁に出願（明治三十九年四月七日許可） 千歳第二発電所水利願書、道庁へ提出 支笏湖口より烏柵舞（カマソウ）に至る水路工事並堰堤工事着工 苦小牧分社発電所工事、大倉組に請負せる 山線、苦小牧村より烏柵舞（水溜）支笏湖まで開通 ネッソウの滝下に工所用仮発電所完成（出力四〇〇馬力・三四五ボルト・三〇七ボルトアンペア） 苦小牧工場・仮発電所間の送電線路完成 樽前山大噴火、道庁の命令に依り工事関係者苦小牧へ避難 降灰地域八五キロメートルに及び（別の資料に三月三十日と記録） 滝の上堰堤並水溜工事完成 発電所第一期工事完成（二五〇キワット×四台） 苦小牧工場まで一五〇〇馬力送電線路完成 苦小牧工場新聞用紙抄出（一〇〇m/c）</p>																				

明治43・9・12	苦小牧工場新聞用紙の販売開始(創立記念日)
44・11・19	小樽電気株式会社への売電(四一〇馬力)「札幌線」
45・1・15	札幌水力電気株式会社へ売電(二〇〇〇馬力)
大正1・10・1	王子小学校第一発電所高台にて開校(大高先生夫妻)
3・6	発電所第二期工事完成(五号機五〇〇キロワット)
4・4・1	千歳村・烏柵舞村と合併、千歳村字烏柵舞となる
5・3	カマソウの滝付近に千歳第二発電所完成
5・9	発電所第三期工事完成(六号機五〇〇キロワット)
6・3	王子小学校第一回卒業式(小西寛氏他六名)
7・7	千歳第三発電所完成
7・9	第一次世界大戦(不況・・・米騒動起る)
8・12	王子病院千歳診療所出来る(鈴木定一先生)
9・1	千歳第四発電所完成
9頃	水溜に鎌田豆腐店開業(昭和十九年廃業)
10頃	谷本亀氏発電所に郵便取扱所開設(昭和十年局になる、昭和十二年十二月支笏湖へ移る)
10頃	水溜に及川商店・谷本商店出来る(昭和十九年頃廃業)
年代不明	(その後田尾商店・・・浜崎商店になる)
年代不明	水溜に請願調査、住宅を置く(後駐在所)昭和二十年頃支笏湖へ移る)
10・2・4	一三時頃、中社宅春日井氏宅より出火、二棟八戸全焼す
年代不明	支笏湖水位低下に依り川掘りする
10・5・1	苦小牧市街大火で大半焼ける、工場社宅被害なし
11・7・22	撰政宮支笏湖・発電所方面に行啓
12・2	樽前山大噴火(この年四回程有り)被害不明
12・4・1	王子小学校に高等科設置三学級に成る(川崎校長)
12・4・8	大暴雨有り発電所各地に被害有り
14	水溜に説教所(満願寺の前身)出来る
14・6・26	三時三五分頃、第一発電所三号水圧管破裂に依り土砂所内に流入

昭和2・9・2	連日の大雨に依り支笏湖水位上昇、昭和十一年十月まで旧川放水
2・12・4	小川徳太郎氏感電事故、火傷を帯び王子病院に入院
3・2	水溜児童合宿落成、第三・第四発及び牛の沢(藤の沢)方面の通学生を冬季期間収容
3・2・21	千歳第一発電所二号水車主弁破裂事故
5・8・20	水圧(流)に依り屋根十坪吹き飛ばす、人命に別状なし
6・4・15	一号・二号・三号発電機冠水使用不能に成る
6・6・12	一五時三〇分頃水溜より大量のゴミを含む土砂押し寄せる、現場内に侵入
6・6・21	王子小学校公立烏柵舞尋常高等小学校に改称(高倉校長)
7・5・3	支笏湖水位急上昇・・・旧川放水する
10・9・28	千歳第三発電所水車主軸亀裂を発見、九月十九日取替完了
11・5・2	千歳第一発電所No五号機風導増設工事始まる
11・7・11	この日九時～四時頃まで未曾有の大豪雨あり、被害甚大なり、第二発電所付近に於いて大小十カ所山崩のため放水路・道路・埋没、決壊し所内浸水、第一に於いて溢水路埋没土砂に依り事務所・修理工場埋まる、その他電柱倒折損事故多し
11・8・19	発電所屋根コンクリート張りよりマルソイ直張りに改良す
15・2・16	大雨有り(滝上二四七・六ミ、水溜二〇八ミ)滝ノ上水位六・〇一〇
15・7・10	規定より約五〇センチオーバー、旧川放水、下流各発電所少々被害有り
16・2・8	九時頃滝ノ上取入口川側壁隧道口より五五センチ崩壊事故発生
16・7・8	十月五日復旧工事完成す、四七日間
	支笏湖取入口川ザライを施工
	千歳第二発電所水車主軸折損事故発生
	千歳第五発電所完成
	太平洋戦争起る、従業員並子弟の出征始まる

昭和 38・9	クラブを水溜に移改築の上、厚生会館と早川工場長が命名
39・4・3	水明小学校廃校、支笏湖小学校と統合、児童バスにて通学
39・9・9	千歳川神社水溜公園に移る
40・9・9	室蘭(日鉄)・定山溪方面へ研修旅行
41・3・15	水明中学校廃校、中・高生徒苫小牧へ通学
41・9・1	恵庭発電所の操業を雨竜電力KKに移管
41・9・1	従業員積丹方面に研修旅行
41・11・11	千歳第三発電所水車発電機改造工事完成
42・8・27	千歳発電所一連の昇圧工事完成す
42・12	村上所長送別大相撲星取に依る土俵入り
43	従業員函館方面に研修旅行
44・1・30	千歳第一発電所一号工事、配電室工事完成
44・8・23	小寺リゼさん千連線(社宅より三〇〇㍍)付近にて、熊に襲われて死亡
47・7・1	雨竜電力KK従業員(漁川)王子製紙に採用(恵庭発電所無人漁川より制御)
48・10	千歳第二発電所水車主軸折損事故
49・5・5	発電所最後の親校会
49・6・21	組織改訂に依り勤務員苫小牧より通勤
49・9・12	発電所従業員・家族のお別れ会
49・10	発電所解散会(於苫小牧成志会館)

千歳の大規模遺跡調査と世界遺産登録

畑 宏 明

北海道埋蔵文化財センター
常務理事

美々貝塚と新千歳空港

今から四〇年以上前になるが、私が千歳の遺跡をはじめ訪れたのは昭和四十（一九六五）年春のことであった。北海道学芸大学（現在の教育大学）に入学したばかりであったが、すぐさま考古学研究室に出入りさせてもらっていた。そこへ、地学研究室から、ゴールデンウィークに千歳の美々貝塚周辺を巡検するので参加しないかとお誘いがあった。

当日は、よく晴れた絶好の巡検日よりであった。札幌駅に集合、普通列車で現地に向かう。美々駅で降り、踏切を渡り小高い丘の上にある貝塚へ向かう。貝塚はその発掘地点を観察できるように木枠で土留めされていた。発掘穴の底の方に白い貝層が見える。私が貝塚の断面を見たのはこれをはじめで、黒土と白い貝殻のコントラストがとても鮮やかで印象的であったことを記憶している。

美々貝塚の巡検から一〇年近



写真-1 美々貝塚の断面

く経ち、私は北海道教育委員会（以後「道教委」）に文化財保護の専門職員として勤務していた。昭和四十九年から千歳市教育委員会（以後「市教委」）が行っていた新千歳空港の埋蔵文化財分布調査が終了し、五十一年から道教委が発掘調査を行うこととなった。調査は私も担当することとなったが、新しい空港の建設地は、美々貝塚から国道36号を渡った西側に広がる懐かしい美々の丘陵地帯である。

大規模調査の試掘

新千歳空港建設予定地の美沢川流域遺跡群の調査は、結果として二〇年以上にわたり二〇^〇以上の広さを発掘することになるのであるが、道内では苫小牧東部工業地帯と並ぶ大規模調査となった。当時としては、道内では誰も経験したことのない大規模な発掘調査であるから、さまざまな課題を乗り越えなければならなかった。それは前段で市教委が行った分布調査の時点から始まっていた。

当時は学園紛争の余波がまだ冷めきれず、前年の昭和五十年に開かれた日本考古学協会札幌大会も紛糾し、多くの研究発表が中止を余儀なくされた時代である。埋蔵文化財保護については、教育研究機関である大学が開発行為と関係をもつことが罪悪視されており、文化財保護としての緊急発掘自体もその是非がさかんに議論されていた。

新千歳空港の建設予定地は、広大な山林であり、表面には火山灰層が厚く堆積していた。表面調査ではほとんど埋蔵文化財の情報が得られなかった。そこで、調査のために切り開いた五〇^〇平方メートルの交点をバックホウで掘削し、掘削断面や掘りあげた土を調べ遺跡の存在を確認する手法が採用された。今日では機械力を活用して試掘を行うのが一般的であるが、一部の研究者からは遺跡の破壊につながる確認方法であるとの批判があった。情



写真-2 新千歳空港建設予定地での発掘調査（千歳美々4遺跡、昭和58年度 道埋蔵文化財センター提供）

報の乏しい場所で遺跡の探査を行おうとする場合に機械力を活用して行う試掘調査は、今では遺跡に与える損傷の程度はわずかであり、地中の様子を容易に見ることができるとして信頼性の高い方法として大方に認められている。しかし、当時は暗中模索時代で、推進する側も疑問を呈する側も想像上の議論の域を出なかったのである。

これ以降、道教委では埋蔵文化財の確認のために日常的に試掘を行うようになったが、その後の埋蔵文化財の把握が完璧かという点必ずしもそうはなっていない。重機の性能を超えた深さなどの場合はやむを得ないとしても、多量の黒土から、少量の小破片しか出土しない場合は、見落としてしまうエラーを完璧になくすることは難しい。現地の条件などを考慮した適切な運用が望まれるところであるが、近年は恒常的な予算の減額などもあり、現場担当者にとっては相変わらず困難な局面が続いている。

発掘の単位区画の設定

発掘調査の進め方や遺物整理のための分類基準についても悩みは尽きなかった。その頃の発掘調査は、二六四方の単位区画（現場では「グリッド」と呼び習わしている）を採用することが多かったが、それを試掘調査で採用した五〇四方眼の測量線に合わせようとすると、一辺が二五区画、区画数は六二五区画となる。空港の全域をこれで扱うとなれば煩雑さが目立つため採用しかねることとなった。そこで、逆に五〇四方眼の区画を一辺一〇区画、全体を一〇〇区画に細分し、最小の単位区画を五区画とした。最小単位を倍々する発想から、十進法で分割する発想に切り替えたのである。しかし、実際に作業をしてみると、五区画の単位区画には長短両面があることがわかった。

長所は、大人数の作業員を役するのに便利なことである。大規模発掘調査では、規模に比例して使役する作業員の数も増える。作業員は一〇名前後の班をつくり共同で作業にあたる人が多いが、五区画の単位区画だと一〇名くらいまで人が入ってもそれほど混雑感がなく作業でき、比較的効率がよい。反面、五区画というのは小型の竪穴住居跡よりも大きく、密集地では一区画の中に多数の遺構が分布することとなり、遺物も多くなる。その結果、土器などの復元や遺構と遺物の共伴関係の判定などの作業に不便をきたすことが多いのである。作業的には、やはり二六四方程度が扱いやすいようである。道教委の事業を引き継いだ財団でも、今では二六の倍にあたる四六四方の区画を採用することが多い。遺跡調査の精度を確保する観点からも、このあたりが妥当なサイズではなからうか。

遺物の分類と名称

もう一つは、土器や石器などの出土品の分類要綱を示したことである。

遺物の分類は物質文化の最終的な認識へとつながる考古学上の最も重要な作業であるが、人により見解が異なるだけでなく、研究の進展によりその変更を余儀なくされることがあるなど、永久不変のものではない。だからといって大規模発掘調査に携わる担当者がそれぞれ勝手な記載をしていたのでは、とうてい調査結果をひとつの報告書にまとめることはできない。そこで、土器については大方の研究者が受け入れられる程度に大まかな分類を行って記載することとなった。

初期のころの記載には粗密の程度に差があるものの、縄文早期から晩期そして続縄文までを、そして、各時期の前半、中頃、後半を a、b、c と記号で表した。この表記は、言葉を記号に置き換えただけのように見えるが、土器文化の体系を見通さなくてはできない仕事である。今日では、道内の埋蔵文化財調査報告書で一般的に見られる表記法となっており、土器編年などの議論ではスタート台としての役目を果たしている。

また石器の分類は、製作技法と形態をもとにそこから推定される機能を加味した分類を行っている。最も特徴的なのは「石匙」の名称を「つまみ付きナイフ」に改めたことである。この石器は縄文文化を代表する石器のひとつで、匙（スプーン）のような形をしていることから古くから「石匙」と呼ばれている。今でも全国的に広く使われている名称であるが、ナイフの機能をもつことが明らかことから表記名を改めたものである。この名称変更については、道内では特段の批判意見もなく受け入れられているが、本州の研究者の中には違和感を感じる人も多いようだ。いろいろな場面をとらえて解説を続けることが必要と感じている。

石器の名称については、例えば「磨製石斧」すなわち「磨いて製作した石の斧」のように製作技法や材質そして形態・機能などを表す言葉を組み合わせて表現することが多い。しかし、縄文石器の機能については形態が

らイメージだけで類推したものが多く、それがそのまま名称となっている。したがって「石槍」と呼ばれるものの中には、とても槍としての機能を想定できないような雑多なものまで含まれることがある。学問としての石器研究以前の曖昧さの表れである。「つまみ付きナイフ」の命名は、そのような古い意識を打破する突破口であると私は受けとめているが、そこまで考えるのは少々大げさであろうか。

世界文化遺産としての縄文遺跡群

新千歳空港の発掘調査は、縄文時代の周堤墓や盛土墓、擦文から近世にかけての船着き場などが発見され、美々四遺跡の「動物形土製品」や「美々八遺跡出土品」のアイヌ文化遺物は重要文化財に指定されている。

その後、平成七（一九九五）年からの北海道横断自動車道建設に伴うキウス遺跡群の発掘調査においても周堤墓と集落跡が出現している。また、最近は国道三三七号の発掘調査でオルイ力遺跡などから近世アイヌの集落跡が続々と発見されている。これらは、いずれ



写真-3 国指定史跡キウス周堤墓群（道埋蔵文化財センター提供）

も千歳地域の歴史的な発展を証明する遺跡である。遺跡の詳細については発掘報告書として順次公表されているが、貴重な出土品も多いので多くの方々にご覧いただきたいと思っている。

昨年、北海道北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産の国内暫定リストに載った。道内では函館市南茅部地区大船遺跡の大竪穴住居跡や森町鷲ノ木遺跡のストーンサークル、そして伊達市北黄金貝塚などが候補になっているが、今のところ千歳市が誇る国指定史跡「キウス周堤墓群」は候補となっていない。

キウス遺跡は、縄文時代の精神文化のピークを表す大規模墓地遺跡であり、これを抜きに縄文遺跡の世界遺産登録はあり得ないと私は思っている。是非とも多くの市民の理解を得て候補に加わってもらいたいものである。

平成二十二年の春ごろには、旧長都小中学校跡に千歳市の新しい埋蔵文化財センターがオープンする予定である。ここでは常設展示も準備されているとのことであり、千歳の歴史研究と文化財保護の拠点としての活動が期待されている。

幸か不幸か、ユネスコによる世界遺産の登録までには、先行する候補が多いためこの先一〇年くらいの時間がかかりそうである。新埋蔵文化財センターを核とした市民活動を広げるには十分な時間があるので、キウス遺跡を含めた縄文遺跡群の世界遺産登録も決して夢ではない。

市民の手による世界遺産登録の実現を！

青葉公園は市民の宝

今野善行

千歳の自然保護協会副会長

青葉公園に関わって

昭和二十九年四月頃と記憶していますが、千歳時計組合では、青葉公園が作られた記念に公園の入り口である本町から今の百年記念塔まで、道の両側に桜の木を植える事にしたのです。時計店に勤務していた私は他の時計店の若い方々と一緒に、五月の初旬北風が吹く中、トラックの荷台に乗り桜の苗木を受け取りに駒里まで行ったことを覚えています。受け取った苗木を本町の入り口から今の百年記念塔まで、時計店の方々全員で将来の桜並木を思いながら植樹をしたのです。あれから五五年経っています、大きな桜並木が市民を待っているはずでしたが、残念なことにその桜の木は残っていないようです。図書館近くの坂道の両側に桜の木がありますが、まだ若い木でした。しかし中に三本ほど大きな木があり、あの時植えた木ならいいなあと思っています。今考えると、これが青葉公園との付き合い合いのはじまりです。

当時は青葉公園を神社山と呼んでいましたが、ここが千歳の人々のお花見のメッカだった様で、紅白の幕を張り巡らして酒を酌み交わし、ジンギスカンを食べて騒いでいました。

今は千歳小学校のグラウンドと神社山の間に真々地川が流れていて、山には進入禁止の柵で入る事が出来なくなっていますが、当時は川が無く学校のグラウンドから神社山に直接急な斜面を昇り降りしていたのです。山の上には千歳小学校の屋外の教室があり、子供たちは自然の中で小鳥や虫の声

を聞きながら勉強していたようです。また、そこからの眺めは千歳市内を一望でき、素晴らしいところでした。

昭和四十年頃になり神社山から青葉公園へと市民の認識も変わってきました。そのころは今のスポーツセンター付近に水道局の浄水場跡があり、春日町から水道橋（木の橋）が架かっていましたので、その橋を渡って青葉公園へ往き来をしていました。当時は自然も豊かで、オニヤンマがゆうゆうと飛び、カツコウが鳴き、蝉の音がうるさいほどでした。特に今のなかよし広場は、すり鉢型の相撲場になっており、子供たちには格好の遊び場でした。伸び放題の野草の中には、春、夏、秋と昆虫たちが入れ替わり立ち代り次々と現れます。また付近の樹木には子供たちの大好きなクワガタも樹液を吸いに集まっています。そのころ私は、仕事と子育てに追われ、野草への関心もありませんでした。

平成七年、時間的な余裕もでき、青葉公園に出かけることが多くなりました。同八年四月のある日、雪が残っている林の中に黄色の蕾つぼみをつけた植物を見つけたのです。どんな花が咲くのか興味湧き、次の日も出かけ覗いてみましたがまだ咲いていませんでした。数日がたった休日の早朝、見に行くと十字形の黄色い花が咲いていました。早速図鑑で調べると、ナニワズという花で、野草ではなく小低木だったので。

観察していると、夏には赤い実をつけて葉が落ちてしまいました。不思議なこと、秋には緑の葉をつけ、晩秋には黄色の蕾をつけました。自然界の不思議な生態に魅せられ、青葉公園の野草の虜こいつになってしまったのです。この年私は「二〇世紀が終わる今、青葉公園にはどんな野草が生育しているのか調べよう」と思い、平成九年春から本格的に調べてみることにしました。四月、フキノトウからスタート、休日は青葉公園で野草を調べる日々になりました。野草の花が次々と咲き、種名を調べるのが追いつ

かなくなるほどでした。驚いた事に、判明した野草は一五〇種にもなりませんでした。

平成十年、私は青葉公園の野草にどんどのめりこんでいきました。この年には撮影した野草の花は、名前が判明したもので二四〇種ほどになりました。写しても名前が確認できないものもありました。それは花の形がそっくりなのに葉の幅が広いとか狭いとか、茎に毛がある、無い、葉の裏に毛があるとか無いとかでも種名が違います。写真だけではどうしても判明出来ないものも多く、次の年に再調査し写真も撮り直しとなります。しかし、もう一度写し直すのがまた楽しみでもあります。

同十一年には何とか自分なりに納得いく写真とデータが揃いました。そのころ写真を撮るのに夢中になっている間に、青葉公園の自然環境がどんどん変化していました。初めに気がついたのは野鳥の声が少なくなったこと、昆虫が減っていることです。元御料林（注参照）の一部であった青葉公園の自然を守り後世に残すことが急務で、それには青葉公園の自然林に素晴らしい野草の花が咲くことを、市民に知ってもらうことが役に立つのではと思いました。

スポーツセンターのロビーに、週に一〇枚ずつ、野草の花が咲く順に展示しました。四季の移り変わりを六、七カ月ほどかかり展示しました。また文化センターで開かれた、千歳の自然保護協会主催の「千歳の自然展」にも青葉公園の野草の花の写真を展示し、自然の大切さをPRすることが出来るようになりました。

青葉公園には絶滅危惧種に指定されている植物もありますが、その個体数は年々減っているのが分かりました。それは数カ所で見られ、明らかに販売のために盗掘しているのではないのかと思われまます。心無い人がいることに悲しくなりますが、野草の花を見ていると次第に心が休まるのを感じ

じます。これも青葉公園の持つ癒しの力です。

『青葉公園の植物』

（千歳の自然保護協会発行）

平成十五年、千歳の自然保護協会の理事会で「道立千歳高校が昭和四十一年から四十三年にかけ青葉公園の植物調査した記録による、と今では見かけない植物がかなり記録されています。また地球温暖化などによる植生の変化があると思うので現在の状況を記録しておこう」と斉藤勇作会長から提案があり、調査をすることとなりました。同年秋、植物に詳しい斉藤会長を中心に第一回の調査を開始しました。



写真-1 ツバメオモト（燕万年青）
この株は盗掘され今はありません。

同十六年春からは自然保護協会会員でチームを作り調査を開始しましたが、その矢先に会長が急逝。植物調査の計画が実行不能な状態になってしま

まい、会員が頭を痛めていた時、故斉藤会長の後輩で札幌市に住む笹原忠司と樹木医の真田勝の協力が得られることとなりました。四月から十一月まで月三回の調査を行い、冬は調査資料のまとめと写真等の確認を行い、写真の有無や、またあっても写真の出来不出来があり、次の年に撮りなおすもの等の確認作業を行いました。同十七年になり、野草の調査は月三回では十分な調査が出来ないことがわかり、会員との全体調査は月三回、個人的には時間の許す限り最低でも週二回以上は調査することとして、四月からスタート、調査については原則青葉公園の散策路から確認できるものとし、林のなかには踏み込まないことにしています。南側から調査を開

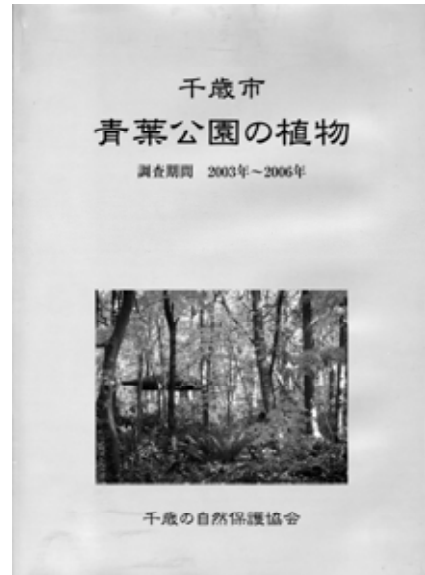


写真-2 青葉公園の植物

始、フキノトウや、キバナノアマナ等から春が来ます。平成十八年一月、調査結果の資料作成にとりかかり、科の分類、種名の打ち込み、写真の貼り付け、そして花の説明と作

業をすすめて、まとめに入りました。その後、市の市民協働事業である「みんなので、ひと・まちづくり基金助成事業」による本の作成費用への助成が認められることとなりましたが、助成金と手持ち資金でもまだ足りず、ユネスコ協会の「草の根基金」からも支援を受け、同十九年二月二十八日発刊することが出来ました。

学校の教材として活用されることを考え、発行部数は一〇〇〇部となりました。各学校関係、公共施設、関係機関など計六五〇部を配布し、残りは観覧会等の資料として貸出用、また当初の計画通り会員の資料として配布をしました。

野草四方山話

野草を観察し種名を調べるうち、和名は植物の形からのものが意外と多く、ダイコンソウ等は葉が大根の葉に似ているから、ルイヨウボタン（類葉牡丹）は名の如く葉が牡丹の葉に似ているから等です。

一般に早春の野草は、冬籠りしていた動物の食用なのか意外と食べられる野草が多いのです。一部毒草もありますが、これは薬草にもなりますの

で、植物は動物にとり大切なものである事はこのことからでも理解できま

す。北海道医療大学の薬用植物園、北方系生態観察園担当の堀田清先生の講義の中で、「もし地球上から植物が消滅したら地球上の全ての生物は絶滅するでしょう」という話を聞き、雑草だ、雑草だとむしりつついた植物は、私たちにとり大切なものだったので。知人が、造園屋に「庭の花が育たないんだけどどうしたら良いですかね」と尋ねたそうです。すると「父さんせつせと毎日草取りをしてるんでないの」といわれ、「そつだよ」と答えたら、「それは駄目だ、砂漠には草は生えないよ、草も生えない土地に花はよく育ちません」といわれたそうです。雑草だ、雑草だと全部抜いては駄目みたいです。

【タンポポ】今私たちの身の回りにはたくさんタンポポが見られます。ほとんどがセイヨウタンポポです。これはヨーロッパ原産の帰化植物で、明治の初年に札幌農学校（今の北海道大学）のブルックス教師が食用のためアメリカから種を持ってきて栽培したのが始まりで、それが野性化したものです。今は全国に広がっていますが、もともと北海道にはエゾタンポポがあります。でも今はセイヨウタンポポに圧倒され、林や山の道ばたに侘しく咲いています。平成十九年に調査をしたところ、青葉公園全体で一カ所、二カ所



写真-3 エゾタンポポ（蝦夷蒲公英）

二株確認しました。たくさんあるように思いますが、青葉公園は広く道の長さでは全ての小道も含め、延べ七・五^キもありますのでエゾタンポポは三〇^ルに一株しかないということです。

開花時期は五月から六月ごろです。セイウタンポポとエゾタンポポの違いは、エゾタンポポが春だけ花が咲き、そして受粉しないと種子ができないのですが、セイウタンポポは受粉しなくても結実し種子をとばし年中花が咲きます。

そんな旺盛な繁殖の力に圧倒され、エゾタンポポはいつの間にか静かな山林の道ばたへと追いやられたのです。

【オオバナノエンレイソウ】

五月、林のながが白く変わるほど咲く花があります。オオバナノエンレイソウ（大花延齡草）です。

種子は主に蟻が運びだします。一年後根だけを出します。二年目で一枚の葉を出し、一枚葉の時代が五・六年、それから三枚の葉になり、さらに八年から一〇年で花をつけることが出来ます。実に一五年から一六年かかってはじめて花をつけます。今咲いている花は一五年以上の年月を過ごしたもののだけなのです。しかも三枚葉になるのが、蒔かれた種子の〇・二^ルと非常に低い確率なのです。

このようなことを思いながら



写真-4 オオバナノエンレイソウ（大花延齡草）

オオバナノエンレイソウを見ると、また別の思いで見ることが出来ます。

山口幸太郎千歳市長が青葉公園を「千歳の宝」と言つのも、公園内のいろいろな自然の不思議な生態を見ると理解できると思います。これは植物だけでなく小鳥や昆虫の世界を含めると、素晴らしいドラマが生まれていることと思います。終わりになりますが、野草を見るときは必ず虫眼鏡を持って観察してください。別の世界を見ることが出来ることでしょう。

《青葉公園は市民の宝です》

（文中敬称略）

御料林 明治元年北海道の山林は全て官有林となる。明治二十三年に官有林の中

より優れた山林を御料林とし、宮内庁・皇室林野局の管理になる。現青葉公園も御料林の一部で皇室林野局の優秀な技術陣により昭和二十二年まで大切に管理されてきた。

参考資料

佐々木昌治 平成十七（二〇〇五）年 『樽前山麓の森林』
中居 正雄 平成十二（二〇〇〇）年 『とまこまいの植物』 苫小牧民報社

こんな場所に六三〇〇年前の集落があった

西田 茂

北海道埋蔵文化財センター

Key Word 縄文時代早期 集落 長都沼の水位 アイヌ語地名 カマカ

はじめに

私は平成七（一九九五）年から四年ほど、夏期に千歳市内で遺跡の発掘調査に従事していた。この発掘は、高速道路の建設工事に際しての事前発掘といわれるものであり、道路建設によって壊されてしまう埋蔵文化財の記録保存のためのものである。財団法人北海道埋蔵文化財センターは、千歳市内での北海道横断自動車道路建設に際して、平成五（一九九三）年、本格的な発掘調査に着手し、十年に野外での調査を終了した。さらに同十三年以降は、空港から横断道路へ接続する路線について発掘調査が始まり、千歳市内においては今なお大規模な発掘が繰り返されている。

私は四年間のうち、はじめの二年をキウス地区で、残りの二年をユカンボシ地区で過ごした。結果的には、かつて存在したオサツ沼の東側、西側での発掘において、地形、地層について理解を深め、発掘作業ならではの知見を得ることができた（図・1）。

これらの発掘調査の成果を基にして、オサツ沼の形成に関して述べたことがある。その主旨は、「石狩低地帯南部（千歳市・恵庭市・長沼町）で一九六〇年代まで見られた広大な沼沢地の水位は、擦文文化期（一〇〇〇年前）以降の上昇によるものであり、標高八〜九mの高さまでが水浸しになるのは、アイヌ文化期になってからである」というものであった（西田茂



図-1 遺跡の位置 1：ユカンボシC 1遺跡 2：ユカンボシC 2遺跡
3：ユカンボシC 15遺跡 4：キウス4遺跡A地区
（この図は、平成13（2001）年国土地理院発行の5万分の1地形図「恵庭」の一部である）

二〇〇六)。つまり、江戸時代以降の諸記録で広大な湿地として認識されていた沼沢地の形成、水位の上昇という出来事は、考古学的な時間尺度で見ると、きわめて新しい時期の現象であったということとを説明したのである。このときは水位の上昇が起った時期の確定に論を運ぶ必要があったので、長期にわたる縄文時代の水位（地形）に関しては、後期（四〇〇〇年前）以降の概略を記したに過ぎなかった。

本稿では、さきの論文で触れることがなかった縄文時代早期後葉（六三〇〇年前）の集落と水位のことを述べておく。さらに発掘調査で得心したアイヌ語地名「カマカ」についても紹介しておきたい。

一・ユカンボシC2遺跡の集落

ユカンボシC2遺跡の発掘調査が行われたのは、平成五（一九九三）年である。長都地区では農耕地の土地改良事業に伴って農道の整備、排水溝の新設工事などが進展し、遺跡のなかに排水機場が建設されることになり、その工事範囲である東西四〇メートル、南北七〇メートルほどが発掘された。

大正九（一九二〇）年発行の五万分の一地図をみると、発掘したあたりは標高一〇メートルほどで、湿地帯の縁となっている（図・6）。発掘してみると耕作土の下には一七三九年降下の樽前a降下火山灰層が二〇センチほど堆積していた。この降下火山灰層の下は縄文時代早期の住居跡が検出される五〇〜九〇センチの深さまで、黒色土や黒褐色土であった。湿っぽい黒色土や黒褐色土の中ほどの位置に樽前c降下火山灰層があった。この縄文時代晩期後葉（二四五〇年前）に降下した樽前c降下火山灰層よりも上に泥炭層を想定させる「草本」部分が認められた。縄文時代早期のコッタロ式土器の時期の竪穴住居跡は、もちろん樽前c降下火山灰層よりも下から検出された（図・2）。

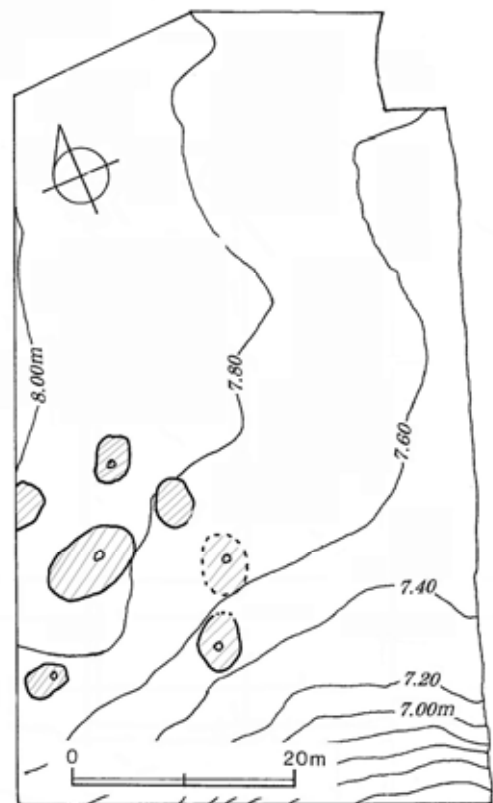


図-2 コッタロ式土器の時期の集落
（ユカンボシC2遺跡）

通常、遺跡の発掘調査では、いろいろな時期の遺構・遺物が検出されるが、この図・2には竪穴住居跡七カ所のみを書き込んであり、竪穴住居跡はすべて標高八メートルよりも低い位置にある。これらの住居跡は、平面形は楕円形に近い形であり、その中央付近に焼土が認められる。考古学的な時期の決定は、それぞれの住居跡について、そこから出土した土器でもってなされる。それらの土器のうちでH・10と呼ばれる住居から出土したコッタロ式土器が図・4である。

コッタロ式土器は縄文時代早期後葉（六五〇〇年前）の時期に位置づけられるものであり、後述する中茶路式土器へと、連続して推移することは、遠藤香澄が指摘している（遠藤一九九七）。

二・キウス4遺跡A地区の集落

キウス4遺跡は、東西一キロメートル、南北八〇〇メートルを上回る大きさの遺跡であ

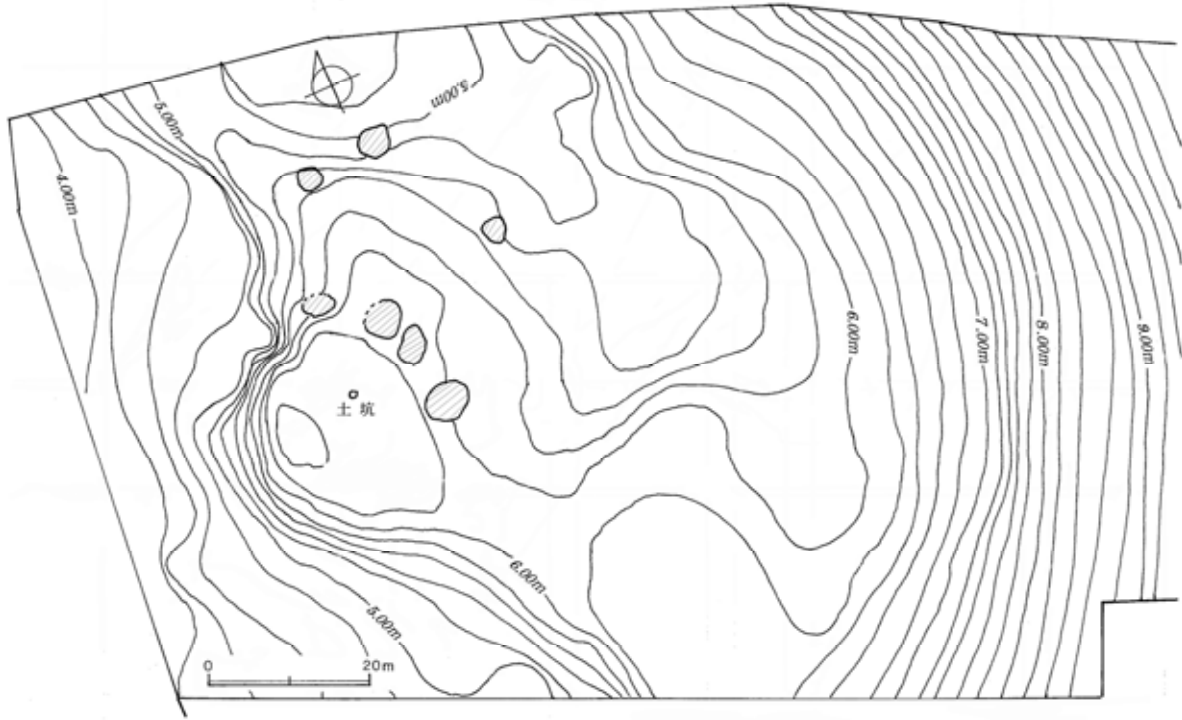


図-3 中茶路式土器の時期の集落（キウス4遺跡A地区）

る。この広い範囲はいくつかに区分されているが、そのもっとも西側のA地区の発掘が行われたのは、平成九（一九九七）年である。この標高六ヶ付近において中茶路式土器の時期の竪穴住居跡が検出された（図3）。この図には竪穴住居跡七カ所と土坑ひとつのみを示してある。竪穴住居跡の平面形は不整長円形であり、長さは数メートルの規模である。すべて厚さ二センチほどの泥炭層よりも下から見つかっている。この住居内には焼土はみられなかった。

これらの住居跡、土坑の時期は、出土した中茶路式土器によって、縄文時代早期後葉（六三〇〇年前）と判断される。図4（右）には、この土坑（ALP20）から出土した中茶路式土器を示した。中茶路式土器は、コッタロ式土器から漸移的に変化してきたものである。この図4に示した二個体の土器と比較すると、それぞれの特色は器形において認められる。底部からの立ち上がり部分の断面をみると、コ

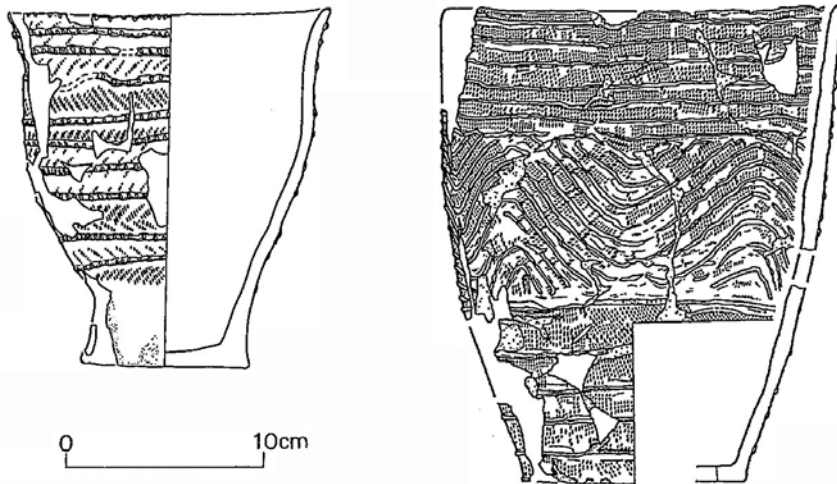


図-4 コッタロ式土器（左：ユカンボシC2遺跡）と中茶路式土器（右：キウス4遺跡A地区）

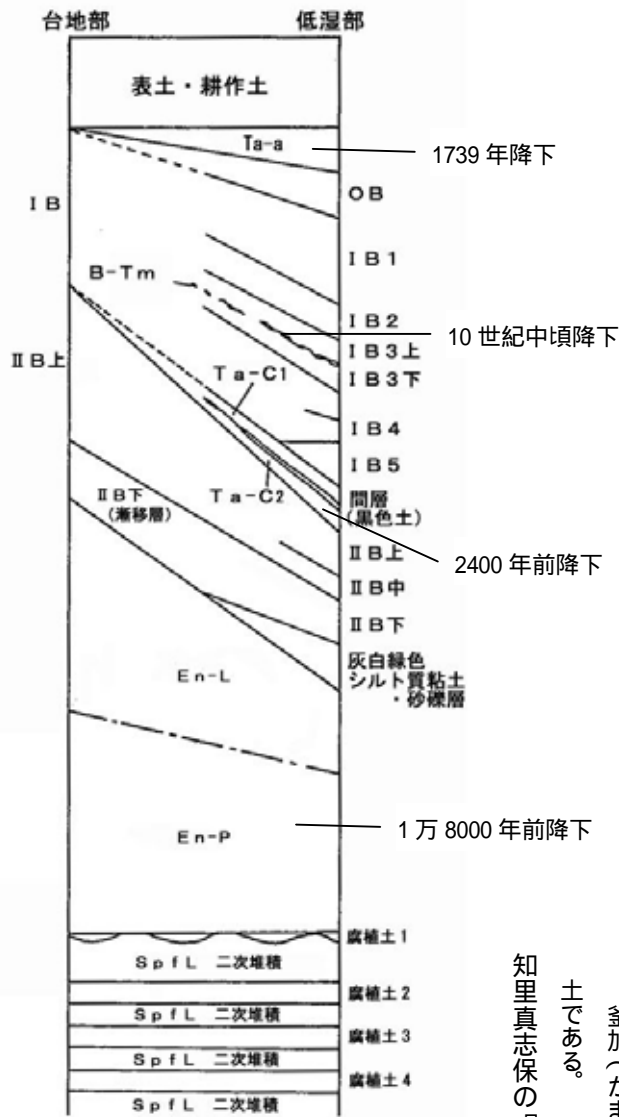


図-5 ユカンボシC15遺跡の土層模式

永田方正の『北海道蝦夷語地名解』（明治二十四年初版、昭和五十九年復刻）は、「カマ」に関連する地名について、「胆振国千歳郡」の項で次のように説明している。

Kama pa カマ パ 扁磐の頭 扁磐ノ東トモ
 Kama kotan カマカコタン 磐上（イワカミ）村

知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』（昭和三十一年）には次のような説明がある。

Kama カマ 平岩 扁磐（「ナ三口」岩）
 Kama so カマソ 平岩 海中の平岩（「平たい・岩」）
 Kama ya カマヤ 扁磐の岸。

ツタロ式では外側への張り出しが顕著であり、中茶路式では外側への張り出しはほとんど見られない。

三・ユカンボシC15遺跡の発掘調査

ユカンボシC15遺跡は高速道路建設に伴って発掘調査が行われた。平成八年から三カ年にわたる調査内容は、六冊の報告書として刊行されている。東西の長さ三〇〇mほどの調査範囲の中ほどには自然河川としてのユカンボシ川が横切っており、低湿部をなしていた。

台地部および低湿部についての土層の堆積状況は、図5の模式図に示した。前述したように、発掘調査における遺構、遺物の観察記録から、水位

の上昇は、この一〇〇〇年間ほどの出来事である（前掲、西田二〇〇六）。さらに擦文文化期の終末八〇〇年前）であつても水位は八m以下であり、アイヌ文化期になると船の航行ができるほどに水位が上昇していることも述べた。

四・アイヌ語地名カマカの「カマ」について

現在「かまか」の地名は、長都大橋よりも下流、千歳川から西側の地域を称しており、漢字で「釜加」と表示されることが多い。これがアイヌ語地名であることは、一八世紀末以降の諸記録が示すところである（図6）。以下、「かまか」に関連する記述をみていく。

『増補千歳市史』（昭和五十八年）では次のようになっている。

釜加（かまか）kama ukka（平岩の・瀨）この平岩は岩石ではなく堅い重粘土である。

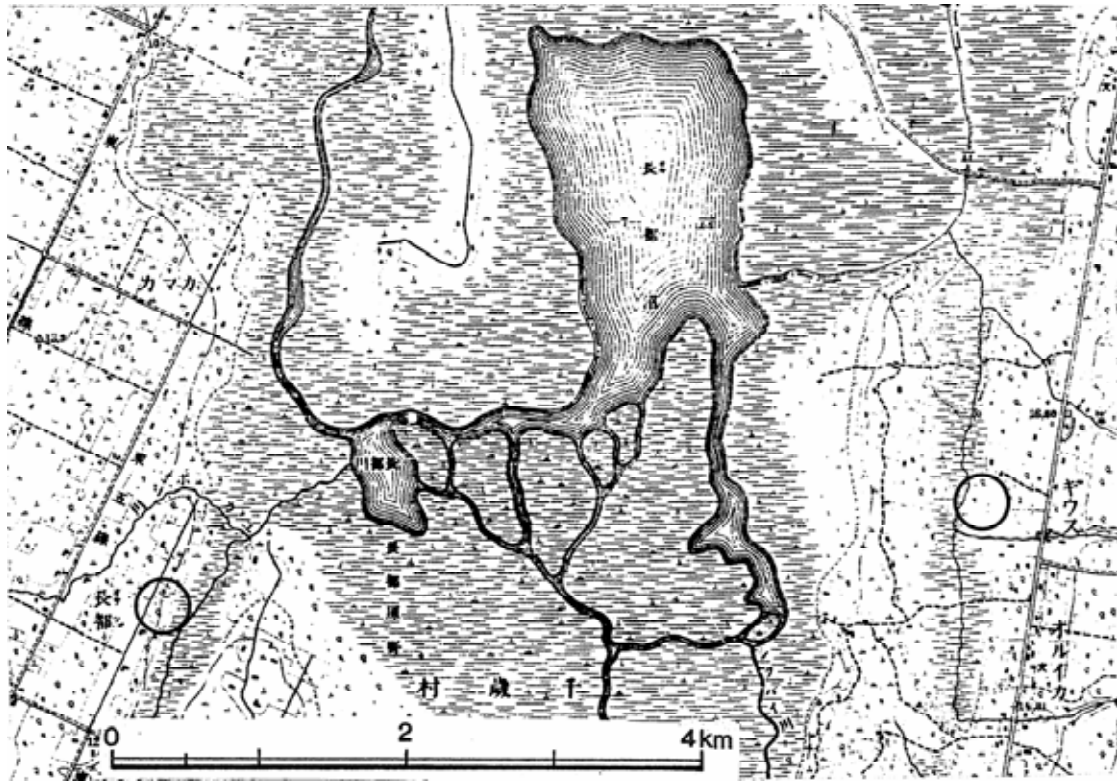


図-6 改修前の長都沼と地名「カマカ」、遺跡の位置 印左：ユカンボシC 2遺跡、右：キウス4遺跡A地区
 (この図は、大正9年「大日本帝国陸地測量部」発行の5万分の1地形図「漁」の一部である)

Kama Keshi カマ ケシ 扁磐ノ下

この永田の地名解には、道内の「カマ」に関連する地名が、「カマ」を最初にもつものだけでもこのほか一五カ所みられるが、それらの「カマ」は「磐」「扁磐」「平磐」と訳されている。

以上にみるようにアイヌ語地名「カマ」は、「平岩」「平磐」「平盤」を意味している。

ところが、千歳市内の釜加地域では、「カマ」地名のもととなったであろう「平岩」「平磐」を見つけないことはできない。なぜならば、かつてのオサツ沼の周辺の地形は、支笏火砕流堆積物(火山灰)を基盤とする低平な地形であり、岩礫類は存在しないのである。そうであるならば『増補千歳市史』に記してあるように「岩石ではなく、堅い土が見出せるのだろうか」。

平成九(一九九七)年、同十年のユカンボシC 15遺跡の発掘は、近世アイヌ文化期(三〇〇年前)から旧石器時代(二万年前)までにおよぶ多くの人間生活の痕跡を調査することとなった。発掘調査の二カ年とも「恵庭a 降下軽石層」(ENP)を部分的に掘り抜いた。一万八〇〇〇年前の降下と考えられる「恵庭a 降下軽石層」の最上部(厚さ一m)は、軽石混じりということもあって、きわめて堅硬な土層である。『増補千歳市史』の「かまか」に書いてある「重粘土」は、この「恵庭a 降下軽石層」のことであろうかという見解にいたった。

発掘においては調査地点周辺の野外探索は重要なので、折にふれてユカンボシ、長都、釜加地区において農地や道路工事の断面、河川の底の観察に努めた。すると、土層の堆積状況や土質の特色から判断して、「かま」土層とみなせる「恵庭a 降下軽石層」が現地表の二〜三m下に表出しているところを見出した。この低平な地域では傾斜が緩慢なので、堅硬な土層は、河川の流水によっては消失しないのである。

二〇世紀後半に千歳川の改修が行われ、流路の掘削・直線化がなされる前は、この川を舟で上下する人々には、川底の硬さが大変印象に残るものであったのであろう。オサツ沼に代表される沼沢地であるにもかかわらず、棹さして自在に進めたのであれば、漢字で「磐」「盤」と記されるほどのものと認識されたことになる。

現在、「恵庭 a 降下軽石層」の露頭が容易に観察できるのは、直線化された長都川と流路の改修がなされたユカンボシ川に合流点付近であり、ユカンボシC1遺跡と呼ばれている微高地のあたりである。

おわりに

かつてのオサツ沼で代表される低湿地の環境は、擦文時代以降のことである。つまり縄文時代早期後葉（六五〇〇年前）以降擦文文化期に至るまで、この地域の大部分は乾いた地（湿地でないという意味）であり、集落が形成されうる環境なので、泥炭層の下に集落が埋まっている可能性が指摘できる。

低湿地としての環境をもたらしたものは、一般論として、流入水量の増大、排出部分の停滞（排水の不調）が想定される。具体的には夕張川水系の流路変更による流入増加、石狩川と江別川（千歳川）の合流部の変更に伴う流下水位の上昇などがあるが、時間軸を加えて論じる資料の持ち合わせはない。あるいは千歳地域の局地的な沈降も考慮すべきであろうか。

引用・参考文献

遠藤香澄 平成九（一九九七）年 「縄文時代早期の土器」『美々・美沢』

（財）北海道埋蔵文化財センター

西田茂 平成十八（二〇〇六）年 「石狩低地帯南部における遺跡の形成と水位の

変動」『北海道考古学』第四一輯

（財）北海道埋蔵文化財センター 平成六（一九九四）年 『千歳市ユカンボシC2

遺跡』北埋調報八六

平成十（一九九八）年 『千歳市キウス4遺跡

（3）』北埋調報一三四

『千歳市キウス4遺跡

（4）』北埋調報一三五

平成十五（二〇〇三）年 『千歳市キウス4遺跡

（10）』北埋調報一八七

『千歳市ユカンボシ

C15遺跡（6）』北

埋調報一九二

平成十六（二〇〇四）年 『遺跡が語る北海道の

歴史』二五周年記念誌

秦一明と二〇年

〜二代目戸長の人物像を求めて〜

東川 孝

二代目戸長秦一明を讃える会 会長

一・二〇年目の集い

平成二十年八月八日は、二代目戸長秦一明の二二四年目の命日である。関係者一〇名は千歳市末広第一霊園で墓参し、会場を移して直会なほあひを開催、秦戸長を偲びながら今までの研究テーマを語り合った。最後に小生から墓碑が改修され命日の墓参が始められて今年が二〇年目の大きな節目を迎えることができた。これは会員皆様の長年にわたる献身的な努力の賜物で深く感謝を申し上げる。会員の高齢化もあって今回をもって、会としての墓参は終了する。今後は各自でそれぞれが墓参をしてほしいとお願ひした。

振り返れば、なぜ我々が二代目戸長の墓碑改修と命日の墓参をするようになったのか。それは、秦一明の関係者が千歳に居住していないこと、現職で急死したことから、当時の有志によって墓碑建立、その管理をしていた新保義美（故人）から、秦戸長は初代戸長石山専蔵が後任とした人なので、石山家の子孫であるキミに管理を願いたいとの要請があった。昭和六十三（一九八八）年の春のことであった。

二・二代目戸長秦一明を讃える会の設立

平成元（一九八九）年二月二十日、二代目戸長秦一明（以後「秦戸長」という）の墓は傷みが進み放置できない状況にあることを確認し、墓碑改修等を行うため、市民に浄財を願うこととして設立した。

これが多くの市民の理解と協力によって、短期間に協賛者二一〇名

（法人二一社を含む）、協賛金二二七

万七〇〇〇円が募り、墓碑改修、記

念誌、協賛者名碑などを作成し、命

日に開眼供養を行った。

なお、現在の墓は昭和三十八（一

九六三）年、北栄墓地から千歳市に

よって移設が行われている。宗派は

曹洞宗である。

三・秦戸長の人物像

（一）秦一明 略歴

ゴシックは札幌県履歴書（官員進退調綴込）に記載されていたもの。

原簿 青森県東津軽郡青森大町平民

文政十一（一八二八）年二月

伊予国新居浜郡榑木村に生まれる

（名は斗鬼三）

・・・（年月日不詳）

西蒲原郡源八新田山岸藤四郎

二女まきと結婚

・・・長男殿三生まれる

・・・養女くら入籍

安政 元（一八五四年）二月二十日

二女かね生まれる（青森大町）

・・・渡島国亀田郡鍛冶村五十一番地

・・・幕府御抱席

・・・二女かね松前藩・藩公婦人腰元



写真-1 秦一明の墓碑（末広第一霊園）

慶心 三(一八六七)年十月 歩兵一中隊嚮導役取締・同心格⁽¹⁾
慶心 四(一八六八)年 (二月 戊辰戦争開戦)
(九月 改元)

明治元(一八六八)年七月十五日 箱館府趨事席、親兵隊長
八月二十六日 給仕席⁽³⁾

十月 (二十日 旧幕榎本軍・鷲の木海岸上陸)
二十四日 清水谷府知事に随行して青森へ渡海 長男
殿三(鼓長)、塩谷采作(分隊取締役)同行

親兵隊を新兵隊と改称
黒石宿陣中、従事席

明治 二(一八六九)年 四月 榎本軍討伐のため上磯郡泉沢に渡り矢不
来・七重・亀田などに転戦

八月 榎本軍降伏後、この戦いで兵員減のため新
兵隊・在住隊合併して函衛隊と称し、隊長
になる

(八月 胆振国千歳郡編成)
(八月二十日 高知藩支配)

九月 砲兵隊長兼務
十月三日 開拓使少主典⁽⁴⁾
明治 三年(一八七〇)年一月 御用掛開拓少主典

「斗鬼三」を「一明」と改名
(・・・高知藩・ママチ川両岸拓殖)
函館火災消火指揮で手当三百匹受領

明治 四(一八七一)年三月 函衛隊長被免、同隊用掛
四月十七日 函衛隊を護衛隊と改称

明治 五(一八七二)年 五月 (四月 開拓使千歳出張所開庁)
砲兵隊解隊、祝砲扱いの砲卒

明治 六(一八七三)年五月 (十月 千歳郵便局開局)
元函館府砲兵は陸軍省に移管六月権中主
典、福山紛擾に砲兵隊責任者として出勤

七月四日 (口達) 江差福山人民暴動二付、歩兵一小
隊大砲隊二組卒七弘明丸二塔シ江差へ向
ケ出張

明治 七(一八七四)年二月五日 (十二月 室蘭街道開通・千歳駅通所開設)
依願免本官

明治 八(一八七五)年八月十四日 大監吏申付(函館税関)⁽⁵⁾
明治 九(一八七六)年七月十六日 函館税関吏として明治天皇奉迎

明治 十一(一八七八)年 (十月 官営美々鹿肉缶詰所開設)
明治 十二(一八七九)年 (一月 明治天皇行在所豊平館着工)
五月一日 小樽税関在勤

明治 十三(一八八〇)年 (七月 郡区町村編成・五郡役場開庁・本
郡苦小牧)
(・・・寺子屋開設)
(三月 戸長役場開庁)⁽⁶⁾
(四月 小学校授業開始・戸長宅)

四月二十六日 依願免本官
千歳郡漁村九番地塩谷采作宅寄留

・・・千歳村十一番地(石山寺蔵所有地)に仮
住まい
十月 千歳村十九番地戸長役場に移転

十月二十五日 千歳郡各村戸長任命
二十八日 千歳郡各村戸長拜命

明治十四（一八八一）年四月

千歳教育所設立・戸長授業を兼務

九月二日

（八月 豊平館完成）

午前七時明治天皇豊平館御発轡

午後四時二十五分千歳村行在所御着轡

明治天皇をお迎えする

非常御立退所・石山専蔵宅

三日

午前七時千歳村行在所御発轡

苦小牧学校千歳分校学務委員

明治十五（一八八二）年

札幌病院に入院

八日

戸長現職のまま病気で死亡

……妻まき追われるかのように千歳を去り、

二女かねの嫁ぎ先・漁村塩谷栄作宅に同

居

（……山口県人三三言千歳移住）

この経歴を見るに、文政十一（一八二八）年の出生から慶応三（一八六七）年の歩兵一中隊嚮導役取締・同心格就任までの期間がほぼ空白となっている。この三九年間は何をして、どのような活躍をしていたのだろうか。この空白期間を調べるのも課された務めであろう。

（二）その人物像

秦戸長の人物像を知るため、初めから探していたのは本人の写真と人物の画であった。道立文書館、函館市史編さん室、函館税関等で調べたが、これらはいまだに不明である。そうすると人物像は残念ながら推測するか方法がない。ここで現存の資料を見ると、

明治元（一八六八）年履歴短冊

「伊予国新居郡西條榎木村・草莽」

明治二（一八六九）年官員進退調綴込

「松平右京大夫領榎木村・元庄屋」

明治十八（一八八五）年札幌県履歴書

「渡島国亀田郡鍛冶村五十一番地・平民」

「胆振国千歳郡千歳村二十二番地・平民元愛媛県」

とある。

この「草莽」とは、幕末の正規の武士身分ではない志士。本来は草むら意味し、草莽の臣あるいは草莽の志士と称した。

秦氏は東は美濃から西は伊予・筑前に及ぶ広い範囲に居住し、土木かんがい技術など先進技術をもたらした。一説には中国・秦から亡命した人、朝鮮半島出身の新羅の渡来人とする説があるが、近年は後者が有力とある。

草莽の志士は、前述のとおり武士以外の身分のものだが、榎木村の秦氏は、西條の東飯岡を支配した豪族であるが天正の陣後、その一族の一部が榎木に帰農したといわれる。「西条誌」（天保十三（一八四二）年儒学者日野暖太郎和煦編）によれば「この者の家、御拜地前より庄屋にて、当村の開基なりといふ。（中略）代々庄屋役を勤む」との記録がある。その末裔の一人が秦斗鬼三であった。

幕末の西條藩は尊王の気風が強かったが、西條藩は、御三家紀州徳川家の分家に当たり、藩政上も宗家和歌山藩の影響が大きかった。藩論も大勢として、宗藩にならって佐幕の方針であった。

秦家の子として生まれた斗鬼三は、近藤篤山・南海らの思想に影響を受け、草莽の志士として出奔したのだろうか。

（三）新潟・青森での行動

平成九（一九九七）年八月の大谷レポート「秦一明とその末裔」による

と、秦戸長は、新潟県平民山岸藤四郎二女まきと結婚、子には殿三、かね、養女くらがいる。かねは安政元（一八五四）年二月二十日出生、年月日不詳で青森県東津軽郡青森大町「秦一明二女人籍又」となっている。

当時の青森は、人口七、八千人の津軽藩の港町・青森大町は現在青森県立郷土館のある辺りで、当時は商工業者のマチであった。

かねは、渡島国の住人塩谷栄作と結婚する。塩谷栄作は弘化二（一八四五）年生まれ、函衛隊員で、のちに千歳郡漁村（現恵庭市大町）に移り、明治二六（一八九三）年、支笏湖の現在の丸駒温泉の以前に、温泉旅館を経営した。また恵庭村総代人でもあった。

かね四代の末にあたる塩谷克彦は、かねの孫にあたる祖母小林ユキから、栄作は松前藩樺指南役、かねは藩公夫人の身の廻りの世話をする腰元であったが、恋仲になり駆け落ち同然で恵庭に來たと言い聞かされていたと話す。除籍簿によると塩谷栄作の父は塩谷松右衛門。栄作は足軽身分か、一代御抱えの樺指南だったのかもしれない。

結婚の時期は不明だが、明治維新当時、栄作四一歳、かね一四歳である。

図1の家系図を見ると、身内関係の経過はわかるが、秦戸長自らの動きは見えてこない。新潟・青森では何をしていただろうか。親戚関係での仕事か、または草莽の志士としての何らかの活動をしていたのか、今は資料不足のため判断はできない。

しかし、幕末から明治にかけて箱館府給事席、開拓使権中主典、函館税関吏を務め、千歳郡各村戸長として明治天皇行幸をお迎えしたことから、経歴の空白期間があっても、それでこのことが左右されることはない。

想うに、草莽の志士として国を出て最後の仕事として明治天皇を迎え、幕末から明治の激動の時代を強く生き抜いたのは大きなロマンであり、男の本懐ではなからうか。

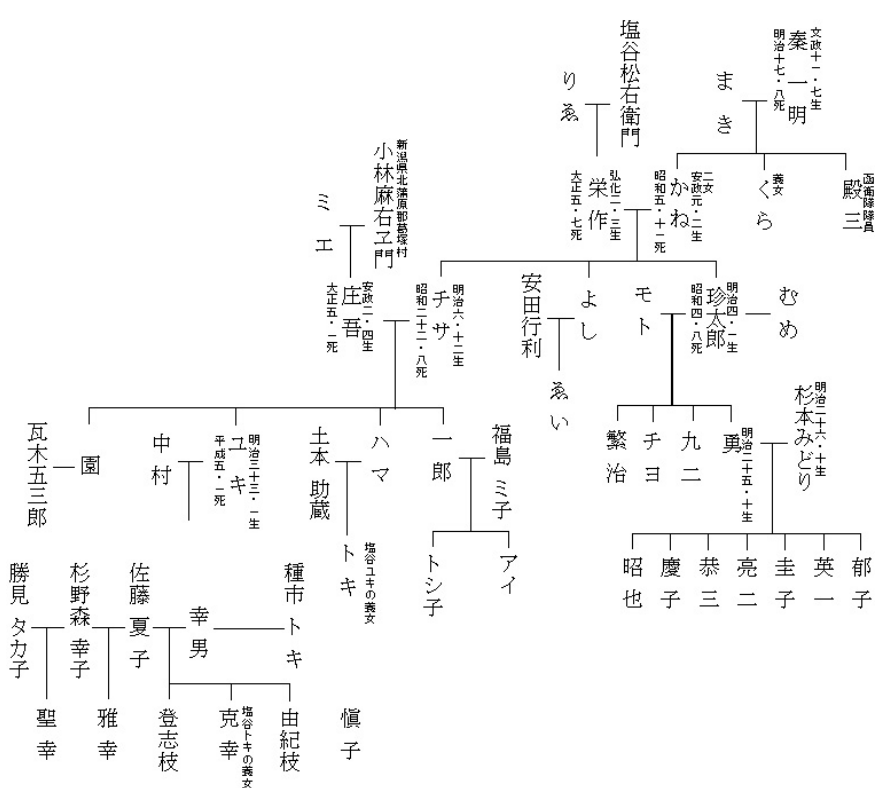


図-1 秦・塩谷家の家系図

四・石山専蔵

小樽税関を退官した秦一明は、娘婿・塩谷栄作のもとに寄留する。一明を開設間もない寺子屋教育所に招いたのが千歳郡各村戸長石山専蔵である。専蔵は草創期の千歳で駆逐取扱人、総代、初代戸長などを歴任した人物として知られる。

専蔵は就任七カ月余りで戸長を辞任する。その後任に任命されたのが秦

一明であった。

石山専蔵は室蘭・岩見沢に鉄道が開設される頃、稚内に移住する。この時点でに分家していた七三郎は千歳に残る。七三郎は水田開発のため蘭越から根志越までの用水溝開鑿にあたり指導的な役割を果たしたことで知られる。

五・今後の課題

秦戸長の墓碑所在地は次のとおり。

所在地 千歳市稲穂二丁目 千歳市末広第一霊園 三A区三列又号

使用面積 四平方メートル

許可年月日 昭和三十一年

再発行 平成元年七月四日

二代目戸長秦一明を讃える会は、平成元年から墓碑の管理と命日の墓参を続けて二〇年になったが、今は当時の関係者も死亡、転勤、高齢化等によつて、本来の目的を十分に果たせなくなった。今後の管理をどうするかを検討しなければならない。

秦戸長は、千歳草創期の戸長として、小学校の開設、明治天皇行幸の奉迎など、本市の基盤を築いた功労者でもあることをよく理解してほしい。

『増補千歳市史』の執筆者で北海道文化賞を受賞した作家、長見義三は生前、秦一明の墓は千歳市の史跡または文化財として市が指定すべきではないかと発言している。

奇しくも今年、戸長役場開庁一三〇年の年でもあることから、市を中心とした関係者でよく検討することを願うものである。

聡明な皆様のごい知恵を期待して筆を置く。

(文中敬称略)

註

(1) 部隊が横隊に編成されている場合、その両翼に配置して整頓・行進などの基準とする者、各一名をいう。(軍隊用語) 先立って導くこと。案内。

(2) 江戸幕府の配下に属し、与力の下にあって庶務、警察の事をつかさどった下

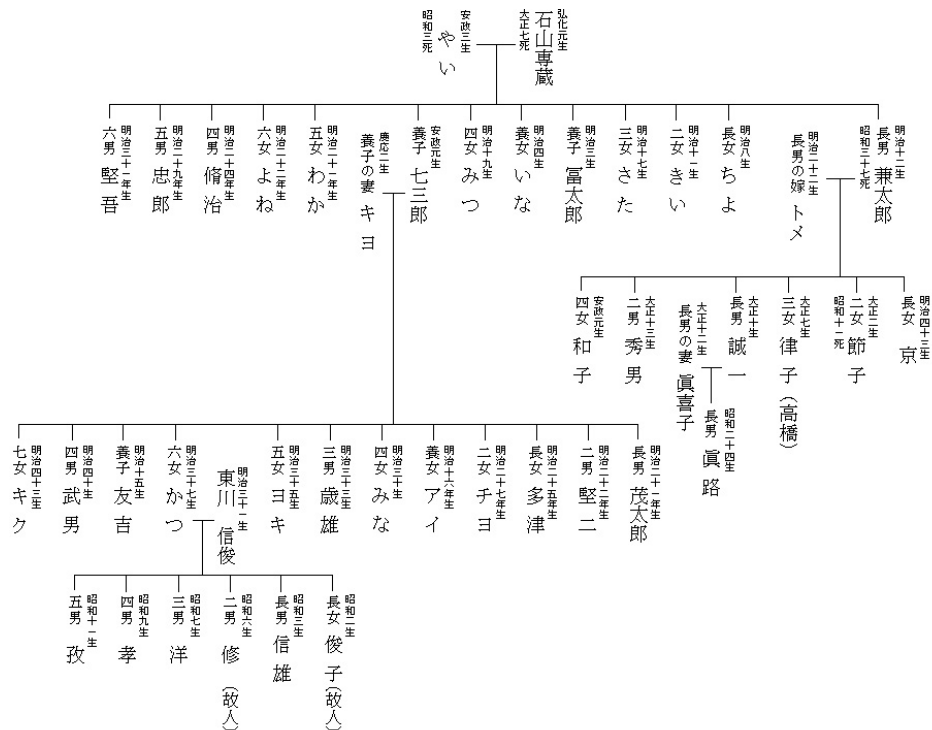


図-2 石山家の家系図

級役人

(3) 箱館裁判所(のちの箱館府)の内部組織の職名。司事・参事・従事・給事・趨事席・無等の順位となる。

(4) 明治二年当時、開拓使職員総数三三五名。少主典は一位・五三名・年俸五〇石(五〇円)、権中主典は一〇位

(5) 税関の内部組織。監史総長、監史副総長、監史長、監史副長、大監史、中監史、小監史の七階級があった。大監史は月給三三円、現在の職制で係長相当

(6) 現在の市役所のこと。明治十一年の郡区町村制編制法に基づき、北海道では翌年から施行され、札幌と函館にのみ区制(現市制)をとり、その他は旧来の郡の下に八二六町村を定めた。しかし当時は寡少な財政事情のため、郡・町村ごとに役場が設置されたわけではなく、数町村をもつて一つの役場を設置した。千歳郡各村戸長役場も同様で、明治十三年千歳村、長都村、漁村、島松村、蘭越村、烏柵舞村の六カ村をもつて戸長役場が開設された。その後、戸長役場の多くは北海道一・二級町村制の施行によって、それぞれ二級及び一級町村へ移行していったが、戸長役場が全て消滅したのは大正十二年であった。ちなみに、千歳最後の戸長は、一六代間山俊助であった(大正三年五月三十日〜大正四年三月三十一日)

(7) 幕藩体制社会の構造的変化の中で、浪人、郷土、豪農、豪商など武士以外の身分の者が、政治運動に重要な役割を果たすようになったからである。こつした層の参加が、明治維新を幕藩制の再編成にとどめない深刻さをもたらした(『新編日本史事典』東京創元社より)。また、『千歳市民文芸 第七号』(昭和五十四年十一月発行)の「千歳開基の頃」で長見義三は、草莽とは「明治維新草莽運動史」(高木俊輔著)に「よる」とし、

- 一 尊攘討幕の主唱者たる豪家の農商
- 二 豪農・地主・庄屋などの村役人層であり、しかも手作経営主であるもの
- 三 地方的な市場圏の担い手である在郷商人層

の諸説があるが、経済的にみれば在郷商人とか、豪家の農商を示す「豪農」層を表わし、政治的には尊主攘夷派に位置づけている。例えば、高山彦九郎を「草莽の臣」と呼ぶ観念がある。その心をもつて秦戸長は自分の肩書としたのであろうかと解説している。

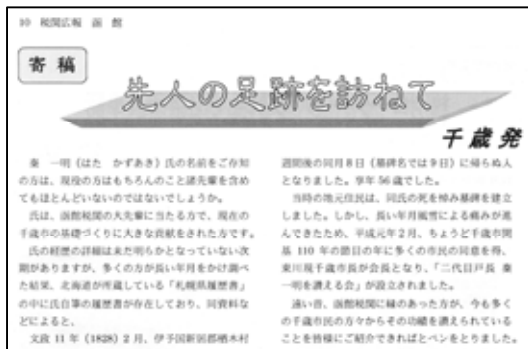
(8) 大谷敏三 平成十七(二〇〇五)年「秦一明の故郷を訪ねて」

秦一明を讃える会研究発表

別表 秦一明を讃える会・研究発表テーマ一覧

発表年	テーマ	研究発表者
H 7	明治天皇御巡幸奉迎概況調	守屋憲治
" 8	秦戸長在任中の千歳の統計	"
" 9	秦一明とその末裔	大谷敏三
" 10	秦一明の居所について	守屋憲治
" 11	新兵隊と秦一明	大谷敏三
" 12	明治 14 年北海道御巡幸	守屋憲治
" 13	箱館戦争の斗鬼三と殿三親子	大谷敏三
" 14	秦一明の死	守屋憲治
" 15	初代戸長石山専蔵と石山家の人々	大谷敏三
" 16	秦一明と三木勉に見る千歳の教育	守屋憲治
" 17	秦一明の故郷を訪ねて	大谷敏三
" 18	第 1 次山口県移民に係る現地調査	小田賢一
" 19	函衛隊と秦一明	大谷敏三
" 20	秦一明の略歴	守屋憲治

戸長就任前に秦が勤めていた函館税関の広報誌に会の活動が紹介された(平成 10 年)。



シコツと千歳の地名解

西田 秀子

千歳市史編さん担当

主任編集員

はじめに

千歳の旧名「シコツ」は、アイヌ地名である。徳川幕府が蝦夷地を直轄した際、初代箱館奉行として派遣された羽太正養はふたのただやすが、文化二（一八〇五）年、シコツ川の「シコツ」は音の響きが悪いこと、また、当地が鶴の生息地であることから、「鶴は千年」の中国の故事にちなみ、シコツ川を「千歳川」に改名した。現在の和語「千歳」の呼び名の誕生である。本稿では、「一 改名以前のシコツ」、「二 シコツ川を千歳に改名」、その中で釜加神社の厨子を紹介し、ついで、『増補千歳市史』に記述されて以来、北海道文化財保護協会会員地蔵慶護によって「本当のシコツはどこか、シコツ発祥の地」が論議されてきたが、本稿の「三 シコツ発祥の地について」を記述することで、新たな見解を提示したい。

一 改名以前のシコツ

シコツの意味 知里真志保（2）によると、シコツはアイヌ語でシコツシコト（大きい窪地、大谷）という（以下アイヌ語発音の促音を表す場合は小文字の「ッ」とする）。「シッ」は「大きな」「本当の・真の」という意味を表し、「コツ」は「窪地・凹地・谷間」の地形を指している。

諸記録にみるシコツ 諸記録に現れた「シコツ」を年代の古い順に抄出してみると、おおよそ表1のようになる。絵図で最も古いものは正保元（一六四四）年、幕府が全国の御国絵図作成のために各藩に命じて提出させた

表-1 シコツ名の変遷抄

和暦(西暦)年	文献(『 』)・地図(*)名	しこつ・シコツの記載	備考
正保元(1644)	*「正保御国絵図」	「ぬま」の図あり。日本海イシカリから太平洋ユウフツへ抜ける「シコツ越え」「ユウフツ越え」の道路を朱色で示す。	松前藩が幕府に献上した絵図。
万治元(1658)	『福山秘府』(安永9年1780年に記録完成)	志古津に弁財天社造立を記録	万治3年ご神体安置。松前藩の史料集成。
寛文10(1670)	「松前蝦夷蜂起巨細上申」	しこつ	「松前下の国しこつと申所の頭鬼菱と申狄」
天和元(1681)	*松前国蝦夷図	志こ津	正保図を基本とし、長久保玄珠(赤水)作。
元禄13(1700)	*元禄御国絵図	志こつ	正保図を基本に改良したもの。
享保8(1723)	『松前年々記』	シコツ	「東蝦夷地シコツト申候所(略)困窮、飢死仕候」
享保16(1731)	『津軽一統志』	しこつ	「ウタウと申狄(中略)しこつへ行詰相果候に付」
元文4(1739)	『蝦夷商賣聞書』	志骨大場所、志骨大将	作者不詳、聞書きによる経済書
寛政9(1797)	『蝦夷巡覧筆記』	シコツ川、シコツ沼(現長都沼)	松前藩士・高橋壯四郎寛光
寛政11(1799)	『蝦夷日記』	支骨川、支骨沼(現長都沼)シコツ十ヶ所	水戸藩医師・木村謙次(近藤重蔵の秘書役) *この年、幕府は「千歳」を含む東蝦夷地を直轄地とする。
文化2(1805)	『休明光記』	千年、千とせ、千歳に改名	徳川幕府箱館奉行・羽太正養著
文化4(1807)	『西蝦夷地日記』	千年川、しこつ沼(現長都沼)	徳川幕府若年寄堀田撰津守の随行者、御小人目付・田草川伝次郎
文化6(1809)	『西蝦夷地旅行日記』	千年、千年沼、シコツ沼(現長都沼)	津軽藩士・竹内甚左衛門
安政4(1857)	『夕張日誌』	支骨湖、志こ津、しこつ沼(現長都沼)	松浦武四郎
文久3(1863)~5	『東蝦夷日誌』	シコツ湖、千歳、	松浦武四郎

ものである。この地図は独立した地図としては残っておらず、わずかにこれを基にして作った「正保御国絵図」の一部として残されているだけである。この絵図には、中央に大きな「ぬま」の図が描かれているだけで、地名シコツの記載はない。だが、日本海のイシカリから太平洋のユウフツへ抜けるいわゆる「シコツ越え」

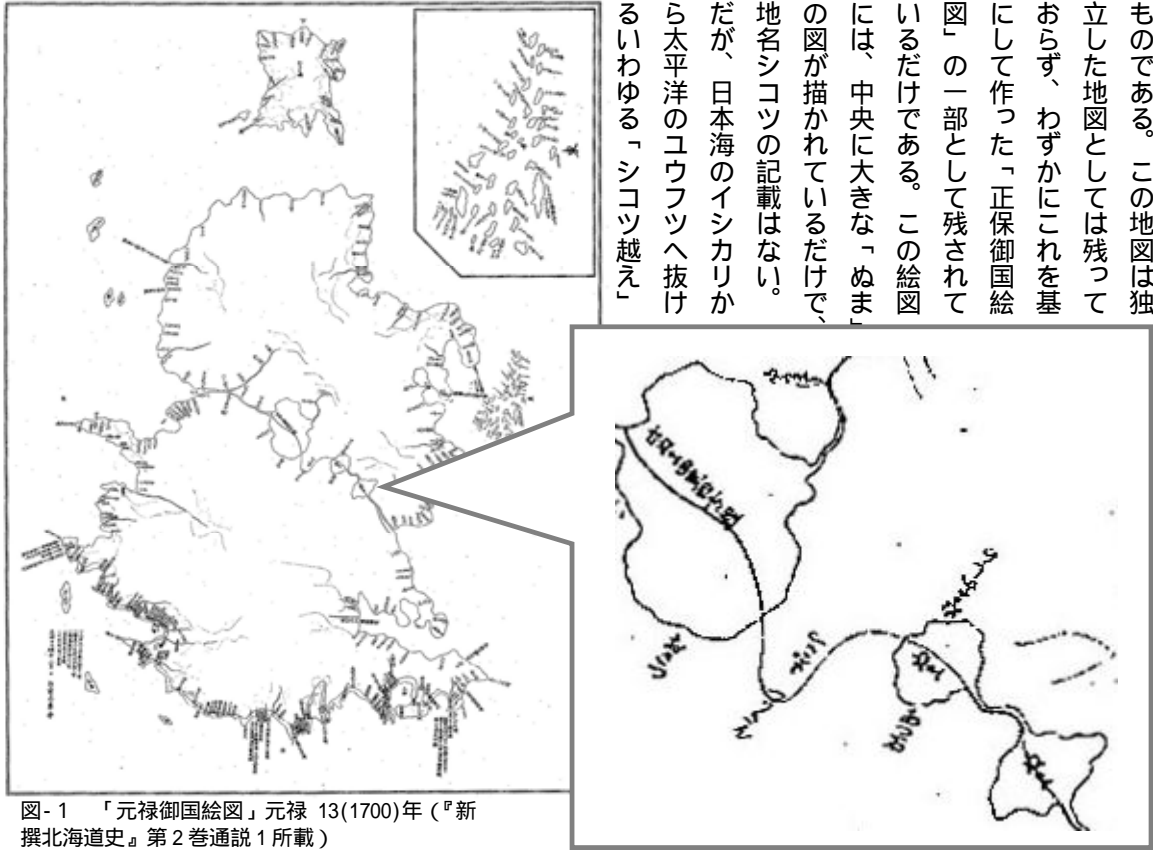


図-1 「元禄御国絵図」元禄 13(1700)年 (『新撰北海道史』第2巻通説1所載)

「ユウフツ越え」の道路が、朱色で描かれている。次の元和元(一六八一)年の「松前国蝦夷図」に「志古津」が登場し、次いで元禄十三(一七〇〇)年の「元禄御国絵図」(図1)には「志古津」、「おさつ」、「ろつさん」の地名が読み取れる。これらは現在の千歳地域を示すものである。

蝦夷地・樺太を实地踏査した地図のうち、最古とみられている先の「正保御国絵図」は、北海道開拓記念館『蝦夷地のころ』に所載されており、「松前国蝦夷図」、「元禄御国絵図」の二点と比較すると、ともにこの「正保御国絵図」を基本に改良し、作成されていることが分かる。

これらの絵図・諸記録は、ともにアイヌ語の音をひらがな・カタカナ・漢字混じりによる一音一字の万葉仮名式で表記している。すなわち、「しこつ」(松前蝦夷蜂起巨細上申『津軽一統志』)、「シコツ」、「シコツ川」(松前年々記『蝦夷巡覧筆記』)、「志古津」(『福山秘府』)である。

漢字表記が現れるのが、「志骨」(『蝦夷商賈聞書』)、「支骨」(『蝦夷日記』)で、いずれも川名や場所名を指している。これらの記録の中で、最古のものと考えられる「志古津」の史料を次に示す。

志古津 『福山秘府』には「志古津」とある。同書は、松前藩主道広が家老松前広長に命じて編さんさせ、安永九(一七八〇)年に完成した松前藩の史料集である。

第拾貳 「諸社年譜並境内堂社部」

一 如来堂 造管之由緒年号不明

東蝦夷地確

「按ルニ慶長十八年此堂建立ナリ

一 弁財天小社 安永七年ニイタリ一百年二十一年ナリ

同 志古津

万治元戌年造管 同三年神体ヲ安置

「按ルニ実八万治三年造立ナルベシ」^朱

ここには万治元（一六五八）年、あるいは同三（一六六〇）年に、東蝦夷地の志古津（現在の千歳）に弁財天小社を造立し、御神体を安置したことが書かれている。

『福山秘府』には、同書を編さんした安永九（一七八〇）年の時点で、北海道東部（東蝦夷地）志古津の外にも弁財天を祀った五カ所として、箱館村（現函館市）・上之国村（現上ノ国町）・江差村（現江差町）・伏木戸村（現江差町）・突府村（現乙部町）が記載されているが、これらはいずれも和人地内であり、海岸部の漁場である。志古津だけが東蝦夷地であり、内陸である。シコツに河川と漁の弁財天小社を造営したのは、シコツ川（のちの千歳川）流域でアイヌと交易をしていた和人であろうか。彼らは越年を許可されていなかった。『福山秘府』では当時、弁財天小社が志古津のどこに建てられていたのか位置までは読み取ることはできない。

「志骨」 シコツが「志骨」として記載されるのは『蝦夷商賈聞書』（元文四年・一七三九）である。シコツは「志骨大場所也」として場所請負制度の運上人八人が紹介され、シナの樹皮で縛った縄を生産すること、鹿皮、熊皮、干鮭など豊富な産物の出所が記述されている。ただし、「大

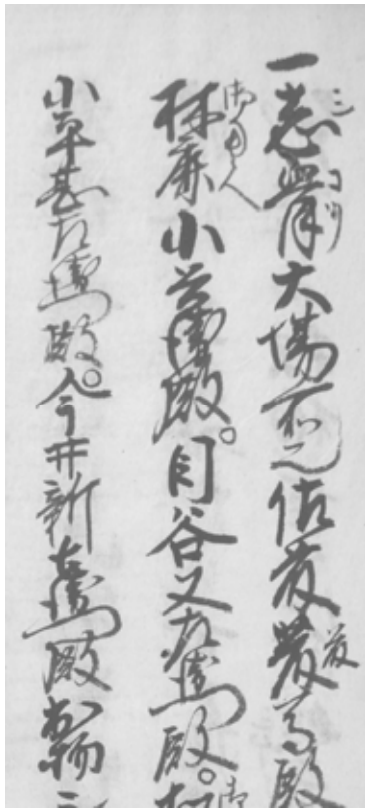


写真-1 『蝦夷商賈聞書』に見える「志骨」、元文4（1739）年

場所」と記されているシコツは、現在の千歳地域のほかも含めた範囲を指している。同書により、初めて「骨」による表記が出てくる。

「支骨」 「支骨」は、水戸藩の医者木村謙次が幕府支配勘定近藤重蔵の秘書役として、エトロフ島（現北方領土）に赴き、初めて日本領としての標木を建てたときの調査日記、『蝦夷日記』（寛政十一年・一七九九）にみられる。

同日記では、訪 差離屋^{ザシオク} 支骨流水湍 二三漁子宅 不知魚市中 何処差離屋」のように、「支骨」を漢詩に用いている。日記の平文ではカタカナ「シコツ川」を使用していることから、「志骨」「支骨」は、歯切れ良く表現したい場合や、漢詩など文字に対して特別な視覚を意識した場合に限って用いたようだ。木村は、千歳が鮭漁の不漁によって、二、三軒の漁家が空家状態となった様子を漢詩に記した。

また、時代は下るが、松浦武四郎の『夕張日誌』（安政四年・一八五七）の絵図には、「題 支骨湖図」（現支笏湖のこと）がある。羽太正養が文化二（一八〇五）年に「シコツ川」を「千歳川」に改名して五十二年後のことであり、もちろん武四郎は川名には「千歳川」と記している。

このように、一音一字の表記が漢字表記に移行していく時期は、幕府がシコツを含む東蝦夷地を直轄地とし、松前藩が開設した場所請負人を廃止し、運上屋を会所と改めた寛政十一（一七九九）年の時期に重なる。エゾ地において内地的には和人によるアイヌ民族の支配が進み、和人の往来が頻繁になる。対外的には、元禄十（一六九七）年にはロシア人がカムチャツカ半島を征服、以降千島列島を南下し始め、安永七（一七七九）年にはロシア人が松前藩に通商を要求するにいたる。天明七（一七八七）年はフランス船が日本北地を探検するなど、この頃からヨーロッパ船の出現も多くなる。幕府は国境を明確にし、周辺の地理を把握するために正確な地図等を

必要とし、巡検（実地調査）を繰り返した。この過程において、アイヌ語地名の和語への置き換えも進むこととなる。

次に紹介する羽太正養が、「シコツ」を「千歳」に改名することにより、アイヌ語とは切り離された和名「千歳」が誕生することになる。

二・シコツ川を千歳川に改名

文化二（一八〇五）年、箱館奉行羽太正養が「シコツ川」を「千歳川」に改名した。改名の所以を、羽太は自著『休明光記』（巻之五）に次のように記している。同書は羽太の在任期間、寛政十一（一七九九）年から文化四（一八〇七）年に至る東蝦夷地経営の顛末を記録したものである。

文化元年 亀田村万年橋を造る。亀田村の橋なれば万年を以名とす。

文化二年丑年 ユウブツの内シコツ川といふ川有。此川の名となへあしければ改度よし、其所を受け持ちたる山田鯉兵衛よりいふ。彼川は鶴のあまた居る所なれば則千とせ川と改む。是も同年の事なり。

これによると、文化元（一八〇四）年、亀田村（現函館市）に架けた橋を亀にちなんで「万年橋」と名づけた。文化二（一八〇五）年、ユウブツ地域を担当している箱館奉行支配調役並山田鯉兵衛が、「シコツ川」は唱えてみると音の響きが悪いので正養に改名を申し立てた。正養は、亀田村の橋は「亀は万年」の中国の故事ちなんで「万年橋」と命名した。したがって鶴が多く棲息している「シコツ川」は「鶴は千年」にちなんで「千歳川」とした。『休明光記』からは以上のことがわかる。

このいきさつを記録したものが釜加神社弁財天を安置した厨子である。釜加神社の厨子 厨子背面に次の一文が書かれている。

あきらけき御代の御ひかりは、至らぬくまもなく、こさ吹（く）蝦夷が島までも御恵をかしくみ、たびまつる事になん、その島のうち、ゆふぶつてふ所

に、しこつ河となんいへる川有、この河何とやらん、とのふるひびきのよからなば、山田嘉充が云ふよりて、そは鶴のあまたをり居る所なれば、千と世河ともいふべきやなと、たはぶれしに、夫（れ）なんよかめりて、嘉充其（の）河のほとりに弁財天を勧請し、なお其（の）ことこのあらましをしるさまほし、といふにまかせて、遂に禿筆とりてつたなき言の葉かきつけ待るものなるかし。末ひろきめぐみもしるし河の名の千とせをかけてしむる宮居は

于時文化二年乙丑春三月
従五位下藤原朝臣正頼謹誌

厨子由来文の要旨 「明るいご時世の光は国のすみずみまで照らしているので、えぞが島までもその恩恵をいただくことになるであらう。その島のなかの勇払という所にシコツ川という川がある。この川はどうしてだろうか、呼ぶのにひびきがよくないから変えてほしいと山田嘉充（鯉兵衛）がたのむので、その川は鶴がたくさん舞い降りて棲んでいる所なのだから、



写真-2 釜加神社（現：釜加72番地の11）



写真-3 弁財天厨子の裏面

「千歳川」とでもいつたらいいだろうと冗談を言ったら、嘉充がそれは良
い名だとし、弁財天を勧請し祀るので、それに改名のいきさつを記してほ
しいと頼むので、口頃愛用している筆を取り、拙い文を書くことになった。

川の名のとおり千歳にわたっておわしますこの社は、いつまでもご利益
があらたですよ」(長見義三「市史つれづれ」『広報ちとせ 88』を一部改め、
引用)

冒頭にある「明るい」時世の光は国のすみずみまで照らしているので、
えぞが島までもその恩恵をいただくことになるであろう」という文言こそ
が、幕府による蝦夷地直轄の威光を顕示しようとする姿勢を表している。

文中には、『休明光記』同様の改名のいきさつに加えて、山田嘉充(鯉兵
衛)が、新たに文化二(一八〇五)年、弁財天を勧請したことも記してい
る。

弁財天を勧請 それでは、厨子を奉納した弁財天社はどこに造営され
たのだろう。時代は下って安政四(一八五七)年、玉虫左太夫(仙台藩士)
が記した『入北記』のなかに、造営位置の記述がみえる。

九月八日 快晴 朝白霜

(前文省略)千歳川会所へ帰着、已^す二未牌ナレバ辺ヲ一見セント馬ヲ捨テテ歩
行ニテ弁天社等ヲ一見シタリ。此弁天社ハ会所ヨリ申ノ方ニ当タリニ二丁斗リ
行キ小山ニ安置セラレタリ、此間ニ土人家六七戸見ヘタリ、サテ千歳川ハ弁天
社ヨリニツニ分レ会所傍ニテ又ニツトナル

千歳川会所とその船着場は、現在の千歳橋の近く、ホテルかめや(本町
一丁目)の位置にあった。会所より申(西南西)の方角へ一、二町(二〇
〇^歩前後)行ったところの小山に安置されている、といえ、およそ現在の
千歳神社にあたる。現在は、千歳神社境内の一角に、文化二年造営の弁天
社の痕跡を示す標柱が立てられている。

その後、弁財社は地元の漁場持の新保清次郎が、明治二十二(一八八九)
年、千歳川下流の釜加の自宅庭に堂を建て祀っていたが、明治二十八(一
九〇五)年、釜加神社(現在の釜加七番地の一一)を建立し奉納した。
改名前の千歳(シコツ) 改名直前の千歳の様子を記録した二つの旅日
記があるので紹介する。

(一)寛政十(一七九八)年、武藤勘蔵の『蝦夷日記』^(c)は次のように記し
ている。

七月二十五日 シコツ越とてイシカリ川を船にて登る道あり。この道を
出立す。トイシカリといふ所にて、船中に泊す。二十六日、未明に出船。
イザリ川といふ所にて日もくれ、又々船中に泊す。(中略) 二十七日、
タガたシコツに着船す。二十八日、同所出立。船路にて東蝦夷地ユウブ
ツに着船。一日逗留。

(二)享和元(一八〇一)年、磯谷則吉は『蝦夷道中記』^(a)で次のように記
す。

(五月)四日、申刻過、ウツ口舟に乗(此舟は巾二尺計、長二間計の大
木をくりたる也。棹取之夷人三人、番人一人惣て七人座したりてみな自
由なりがたし)シコツ川を下る。早き事矢のごとし。壱里半計にしてオ
サツトウに至る。周廻凡五里計もあるへし。湖沼ナドノコトヲ夷人唱テ
トウト云。本邦ニテモ池沼ノコトヲ堤トイヘバ是モツツミノコトニテ塘
ナルヘシ。ルウサンより三里余にしてイヒツと言所に至るに、酉の半刻
頃なればいとくるぶして、東西をわき難し。(後略)

改名後の千歳 改名直後の千歳の様子を記録した二つの旅日記があるの
で紹介する。

(一)一つは文化四(一八〇七)年十月、石狩から千歳を経て勇払へ抜け
た田草川伝次郎の『西蝦夷地日記』^(b)である。同書は、文化三年から四

年にかけてロシア船が北辺を襲撃した後、幕府の若年寄堀田摂津守に
随行して蝦夷地を調査したときの日記で、西蝦夷地直轄の下調べも兼
ねていた。

千年川は御用地に成りて之名のよし 元はシコツなり、沼名、川名、
地名とも同じ、今（不明）川名、会所、地名とも千年川なり イヘツ
の上シコツ沼なり、千年川はシコツ沼へ流入（略）

(二)次は、文化六（一八〇九）年、夏、勇払から千歳、さらに石狩へむ
かう道程である。

津軽藩士竹内甚左衛門が、松前から宗谷にいたる蝦夷地検分時の行
程を詳細に記した『西蝦夷地旅行日記』自弘前 西蝦夷地宗谷迄之往
反』をみてみよう。同日記は、これまであまり知られていない史料な
ので、少し長いが引用する。竹内は千歳で一泊し、シコツ沼（現長都
沼）、カマカを通過し江別川を下ってエベツト、日本海の石狩湾へ抜
けている。 ^、v、内、句読点は筆者の補足による。

一、七月廿七日 早朝止宿^ハユウフツ^ツを発し、会所前^キ町斗行川有此事
より川船（丸木船数十艘有大将分之乗船き一艘有幅^キ間斗長さ五間位も
可在丸木船は上^ハ口三尺位底^キ尺斗荷式筒斗入乗組四人船之者一人斗）流
に遡り^ビビ迄五里之間川船也、川幅三、四十間、左右芦原流甚静也河上二
里斗にて沼有ケフンケ湖と云長サ半里余内廻^二里斗と見ゆる（ケフンケ
の沼八勇武津川水源也此所より四方打ち開けたり 申西之間太郎前嶽茂
の方シコツ山申の方白老白辺之高山打続く丑寅に當り石狩嶽ユウバリ山
何れも高幽に見ゆる近辺山なく洪漠之土地也 夫より半道程船行、小休
所有是迄之内河式筋落合ふなり。小休之辺より段々川幅狭くなり、左右諸
木多し、吉里半里斗舟行き、川筋屈曲にして幅五六間位も有可、段々水上
に登り次第幅式三間になる 昼所^ヒは是迄五里の川船也（勇武津川水上

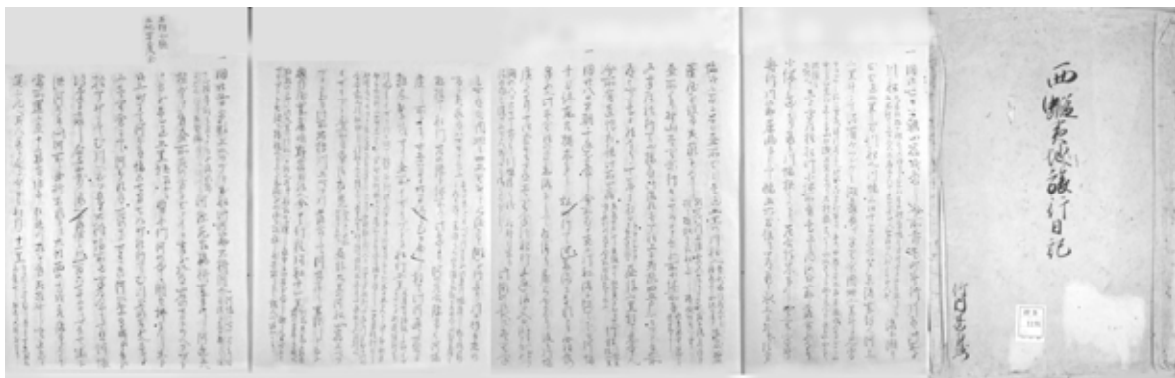


写真-4 西蝦夷地旅行日記（部分）文化6（1809）年：人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵

ビ、湧水にて小沢なり）支度処蓬屋を設け
夷家もなし（都て此川不深五六尺かきりと
見へ故に流にのほると雖も棹越るる故船
はやく櫓機を用へず）昼所より野山吉里余
行キシヤラコと云ふ所休所有（此辺林中
白砂^{（白）}にて道甚よし）又半道程行て、小橋有
此流れ^{（上）}丁程上に夷家四五戸マツと云
ふ所道と間、是より程なく千年^{（上）}に至る
（もとハシコツと云ふ、近頃改る）昼後
二里都て林中也會所有、造作相応此所止
宿（夷家廿戸斗漁獵少く仕入負に至るゆ
へ、唯通行の為に会所を設置と云ふ）行程
（川船五里、陸二里）
一、同廿八日 早朝千年を發し会所前よ
り直に川船流に從て下る 河幅十間位
左右樹木多し、数町行て河両流になれとも、
無程落合ふ也 此吉里程の間、急流にし
て水清く底見ゆるなり 段々川幅広くな
り、十四五間も可有 吉里半程船行千年沼
に入る（もとハ、シコツ沼と云ふ湖の入口
六七丁前より川幅広く浅し 船難航所有
沼の内も深さ三四尺位も可有浅く見ゆる
なり）此湖の長さ吉里半も可有哉、内廻
も四五里斗と見渡る、湖を行畢り川に移
る左の方に夷家有八マカと云ふ（是より

末をイベツ川と云ふ 此辺川幅広し以下段々流も静かに水濁り甚深く見ゆる深き故静かぶに甚強し見ゆれと水勢い) 数拾丁船行左の際に休所有此の辺より河の左右際高く河幅広し所により廿五六間より卅間位にも至るへし都て此河通り左右より雜木繁茂せり昼所イザリフト迄船行五里(九月七日歸路の節イザリフトより新道陸行なり、川向よりイザリ川に拾斗行、此辺芦原にて打開けたる所也、夫より林に入り式斗行き、野辺を行、止宿より二里斗芦野を行林に入る范所々に有れども林中道よし一里半程行きし野合有ヲサツと云ふ 昼支度蓬屋有夫より無程林之内へ入り一里半程行千年川に至る 川向否会所也 川船渡し川船も五里 陸道も五里也今日船と陸と同刻出立して千年着も同刻也) イザリフト普請相應会所所有也 (登に八此所止宿に相成ル) 昼後九里の川船止宿エベツフトに至る此所石狩川エベツ川落合にて河幅広く甚深しと云普通通行屋甚廉略野宿同様也 今日之行程川船十四里 (此所夷家三軒有 船八千歳より通シ也 歸路の節は此九里の川船一日路也 登り船故尤も遅し 夜中に止宿を發し 漸々暮時にイザリフトに着致ス 櫓櫓のミにて急流を登る故存之外果敢とらし旅人可得心なり

田草川と竹内の二人とも、勇払場所請負人山田屋文右衛門が文化二(一八〇五)年同六(一八〇七)年の間に開削した、千歳を挟んで東側の千歳〜ビビ間(二里)、および西側の千歳〜漁間(六里)の「新道」を通っている。千歳〜ビビ間は、牛馬車を通すよう整備した「ビビ山道」といわれている。また、石狩から歸路の竹内甚左衛門は、石狩川(千歳川)と漁川が合流するイザリフト(現恵庭市域)で船を降り、陸路をとった。林を抜け、オサツ川を渡り、千歳会所まで歩いて到着した。その時の様子を「船、陸路ともに五里の行程で、到着時刻も同じであった」と記している。この漁太〜オサツ〜千歳の新道は、千歳川を船で遡るとき、標高差により急激に流れが速くなる千歳会所下流一キロ付近の難所を回避できることから、重

要な道路となる。のちの安政五(一八五八)年に島松〜千歳間が開削され、銭函から発寒、札幌を経て豊平川を渡船で渡り、ツキサップを抜けて千歳に至る河川に頼らない街道が完成すると、松浦武四郎はビビから千歳、千歳から札幌・銭函までの陸路を「東西新道」と呼んでいる。

以上二つの旅行記は、寛政十一年の東蝦夷地直轄を画期として、以降「シコツ」は千歳川、千歳会所、地名も千歳に変わったことを記している。

箱館の亀田との関連 これまでに、『千歳市史』(更科源蔵著、昭和四十四年)では、千歳改名の年次とその理由を、現函館市の亀田改名説に依拠して解説している。すなわち、「渡島大野付近と千歳付近をアイヌはシコツと呼んでいた。」「シコツは死骨に通じ、しかも千歳の近くにはユウフツがあつて、これは「有佛」に通じて不吉なので、渡島のシコツは当時すでに水田化されていたので、亀田と命名し、千歳の方は深い葦原で鶴が沢山生息していたので千歳とした。これは文化二年のこと。」「

ところが、この説は『函館市史 別巻亀田編』(昭和五十三年)による以下のような検証と判断に基づき根拠を失っている。

文化四(一八〇七)年『松前紀行』に、「亀田川を越え万年橋を渡るこのあたりは志こつといひしが、ゆゆしき名なるとて近頃改めしとぞ」とあるが、

「亀田」の地名が最初に見られる文献は、この文化四年よりも一三七年も前に遡った寛文十(一六七〇)年の『津軽一統志』の記事に、「一、亀田川有 濶あり 古城あり」と、すでに「亀田」が記述されている。

寛文年間(一六六一〜一六七二)の地図には、「亀田」はすでに書かれている。

函館の「志こつ」は、『松前紀行』以外にはその名すら発見されていない。『松前紀行』の他の箇所では、シコツはもっと広域の意味で使用されて

いる。

「シコツは死骨に通ずる発音なので縁起の良い、亀田に変えた」という説は、明治以前の文献には見当たらない。

永田方正は明治二十四（一八九一）年、『松前紀行』を引用して『北海道蝦夷語地名解』に渡島の「シコツ、大谷、亀田辺ノ元名」としたのではないが。明治以降に『松前紀行』の「シコツ」と「亀田」の両者のつながりを上手く結びつけるために考え出したものであろう。

渡島の亀田命名説は「亀が生息していた」など他に諸説がある」と説明している。

したがって、『千歳市史』の更科解説部分は、明治以降の永田方正を引用し、さらに羽太正養の『休明光記』に余分な自説を加えたものである。

ここで明確なのは、羽太正養が亀田村の橋を亀にちなんで「万年橋」と名づけたのが文化元（一八〇四）年、シコツ川を鶴が生息するので千歳川と改名したのが翌年の文化二（一八〇五）年ということである。つまり、羽太正養は万年橋との関連で千年の千歳と命名したのである。さらに、先述したように漢字表記に「志骨」「支骨」はあっても、更科解説にある「死骨」と原文に書いた日記等の諸記録について、筆者は未確認である。ただ、編さん物の『北海道志』⁽¹⁾（明治十七年刊行）に「旧名志古津、国音死骨ト通ヌ故ヲ以テテ寛政年間箱館奉行羽太正養改メ名ク」とある。

四・シコツ発祥の地

アイヌ語地名では、地形や場所の特色・形状・植生を指して呼ぶことが多い。では、実際のシコツはどの場所・地域を指しているのであろうか。これについては次のような諸説が述べられている。

(ア) 知里真志保は一九五四年、シコツはもつと広い範囲の地域を指している。「つまり、石狩・勇払間の石狩低地帯を指し、東西南北からの口

をそれぞれ、夕張（イ・ブツ）そのの・口、漁（イ・チャル）そのの・口、ユウフツ（イ・ブツ）そのの・口、江別（イ・ブツ）そのの・口」と呼んだのであろう」としている。

(イ) 山田秀三は一九七八年、地形を基準にしたアイヌ地名のつけ方の「くせ」から考えると、千歳市内の地形は大小さまざままで明瞭な該当場所を挙げることができず、「解しにくい」と言つ。支笏湖に向かつて、市街地から上の方を眺めると、丘の間が広い谷間の地形をなしているので、千歳川の谷間を呼んだのであろうとしている。

(ウ) 長見義三は一九七六年、石狩、勇払地方を含む道央低地帯、千歳川の全流域、ふ化場から上流の溪谷、旧千歳市街を中心とする千歳川下流の地帯としながら、「統治する」という觀念のなかつた古代人は、広大な地域を示す地名を必要としなかつた。狭い範囲の生活で事足りたほど天産豊かであつたからか。その意味では疑問である。

ただ「はふじや地名解」で古老方の支持を得ている。また、かつて知里真志保が北栄（市内）の坂から市街を見下ろしてこれがシコツと叫んだと伝えられている。古人は自衛隊第七師団寄りのキサラオマコツの方を小さい窪地と意識し、それに対してここ北栄をシコツと呼んだか」と記している。

(エ) 長見は一九八三年、『増補千歳市史』においても、シコツの位置については前記の説明までで擱筆⁽²⁾している。

シコツとポロコツでは、本当のシコツはどこか。この疑問に対して新たな説が登場した。

(オ) 榊原正文は平成十四（二〇〇二）年、シコツに対するポロコツ（広い窪地・大きな窪地 Porokot）が、明治二十九（一八九六）年陸地測量部五万分一地図にカタカナ表記されていることを指摘している。

ポロコツの地名は、千歳川を越える街道に架かる橋（現在の国道36号「千歳川橋」にあたる）の約二^三段北西側の「窪地」（現在の千歳市信濃）に記載されている。同地図では、ポロコツは最大幅二〇〇メートルの谷・凹地として描かれているが、現在では市立北斗中学校の西側（自衛隊演習場内）に、幅一〇〇メートル程の凹地が二つ並んで合計幅二〇〇メートル、深さ一〇メートルとなって残存している。同校の東側は市街地に埋め立てたために復元できないが、長さは一^三段は続いていたものと推定され、その地名が意味する通り、かなり規模の大きな凹地であったものと考えられる」としている。

ならば、対する「真に大きい・広い窪地」であるシコツはどこなのか。それは、青葉公園がある丘陵と北海少年院がある丘陵に挟まれた河谷である。市内地図を見ると、国道36号から千歳川上流に向かって現在の錦町・緑町・春日町・大和・桂木の各字名一帯が、千歳川対面の青葉公園の山の法面として、「ポロコツよりも大きい凹地状態で長さは約一・五^三段、幅は七〇〇から八〇〇メートル、深さ四〇メートルである。この場合、谷・窪地の形状を深い渓谷・窪地というよりも、広い谷・窪地と捉えたほうが適切である。

榊原も山田秀三とほぼ同じ場所を指摘している。ここが本当のシコツ、つまりシコツ発祥の地としても良いであろう。図で説明すると、斜線模様で表した一帯を指している。小さい方がポロコツの広い窪地で、対する真に大きい広い窪地が、大きい方の斜線一帯のシコツ地域である。両方の窪地を一つの視界に入れて確認したいところであるが、現在は建物が混み合っていて見通しが利かないのが、残念なところだ。

シコツ、ポロコツの二つの窪地は、ともに、安政四（一八五七）年、箱館奉行が勇払場所請負人山田屋文右衛門、石狩場所請負人安部屋伝次郎に對し、水路によらない道路の開削を命じ、翌安政五（一八五八）年に完成

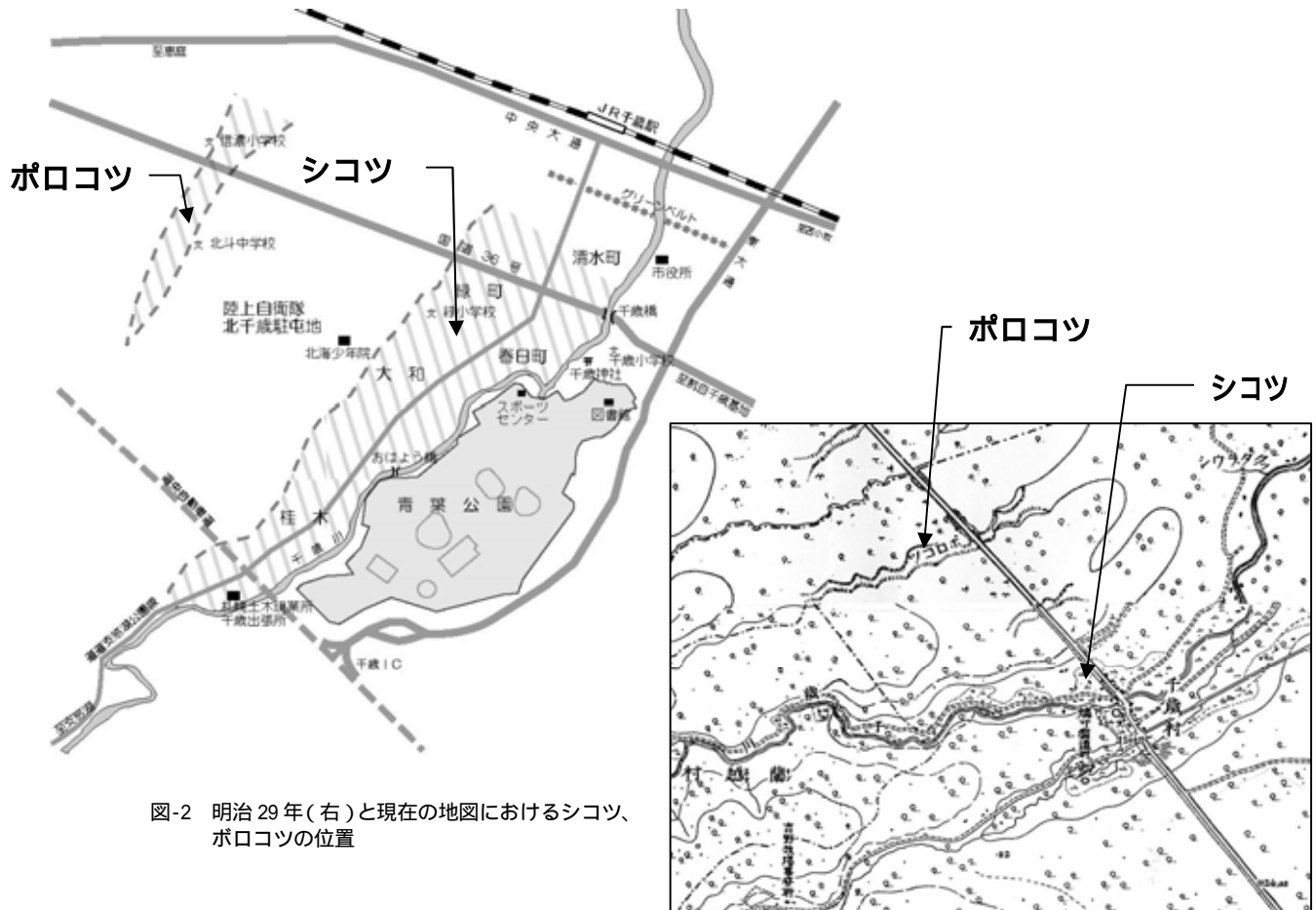


図-2 明治29年(右)と現在の地図におけるシコツ、ポロコツの位置

した街道（現国道36号）を横断する共通性を持っている。シコツアイヌの人々は、『福山秘府』に記録された万治元（一六五八）年から、明治二十九（一八九六）年頃までに至る約二四〇年間、シコツとポロコツを目印や道標として、効果的に使い分けて生活していたのであろう。

しかしながら、未だ疑問点も残っている。ポロコツは明治二十九年地図上に一回の記録があるのみで、今のところ、他の文献に見出すことができない。「シコツ」（真の・谷）と「ポロコツ」（広い・谷）の対応・対比の妥当性も吟味が求められる。

ところで、「勇払・石狩間山道」の千歳と^{（1）}ポロコツの間には、「ヲホコツ」（深い・谷）、「キサラコツ」（耳のある・谷）の地名もある。シコツがあり、それに対してポロコツ、ヲホコツが生じたのであろうか。

おわりに

寛政十一（一七九九）年に徳川幕府が東蝦夷地を直轄とし、さらに文化四（一八〇七）年には西蝦夷地も直轄とする。この間の文化二（一八〇五）年に千歳に改名された。それ以前は、川名、地域名、沼名をシコツと呼んでいた。

ただ、沼名については、現在の長都沼を「シコツ沼」と呼んだ先述の田草川伝次郎や竹内甚左衛門の例と、一方、現支笏湖と認識して呼んでいる、勝知文（福居芳麿）や磯谷則吉の例がある。勝知文は『東夷周覽』（享和元年・一八〇二）で「シコツ沼。此沼より落る水筋をシコツ川と云」。磯谷則吉は、『蝦夷道中記』で「シコツ川と云。水源はマニハノボリの^{（2）}碇シコツトウより流レ出ル」と記している。このように「シコツ沼」は、二通りに認識されていた。

認識の相違がどこから生じたのか。シコツ沼はシコツ川の水源だと理解

している勝や磯谷は、「タロマヘノホリ」（現樽前山のこと、ノホリ）ヌプリ（は山の意味）、「イシャリノホリ」（現恵庭岳）を実際に踏査している。あるいは、案内人のアイヌ民族を石狩やユウフツツから頼んで来た場合は、千歳地方の細かい地名について不案内のため、単純に一般的な呼び名として沼は「シコツ」（窪地）と呼んだのかも知れない。

シコツ沼が、「支笏湖」の名称、漢字表記になるのは、松浦武四郎の安政四（一八五七）年『夕張日誌』が初出である。現在、シコツの名称が残され、継承されているのは「支笏湖」のみとなった（文中敬称略）。

付記 竹内甚左衛門『西蝦夷地旅行日記』の引用にあたっては、高橋由彦氏翻刻「西蝦夷地旅行日記」（たきかわ歴史地図研究会『古地図に見る西蝦夷地とイシカリ川筋』平成十九年）の解説を参考にした。

註

（1）地蔵慶護が、『千歳民報』に平成五（一九九三）年十月二十日から十二月十五日にかけて、「シコツ歴史散歩」を四八回連載した。このなかで、松浦武四郎著『夕張日誌』「東西蝦夷場所境目取調書」を足で歩いて検証した結果、シコツの位置を、「この沼四里四方」と書かれた「オサツトウからマイトウにかけての大沼、すなわち、大きくなくぼ地をシコツと呼んでいたのだらう」というのが私の結論としている。その裏づけ史料に、田草川伝次郎『西蝦夷地日記』の「イヘツの上シコツ沼なり、千年川はシコツ沼へ流入・・・」をあげて説明している。

（2）知里真志保 昭和三十一（一九五六）年 『地名アイヌ語小辞典』

（3）海保領夫 平成十一（一九九九）年 『蝦夷地のころ』北海道開拓記念館常

設展示解説書③ 一一頁

（4）『松前国蝦夷図』天和元（一六八一）年 高倉新一郎編著『北海道古地図集

成『昭和六十一年所収』

- (5) 『新撰北海道史』第二巻 通説一 昭和十二(一九三七)年所収
- (6) 『蝦夷商賈聞書』元文四(一七三九)年 函館市中央図書館蔵
- (7) 『新撰北海道史』第五巻 史料一 昭和十一(一九三六)年所収
- (8) 山崎栄作 昭和六十一(一九八六)年 『木村謙次集 上巻』
- (9) 松浦武四郎 『夕張日誌 全』 北海道立図書館マイクログフィルム
- (10) 『新撰北海道史』第五巻 史料一 昭和十一(一九三六)年所収
- (11) 昭和五十二(一九七五)年四月二十三日、千歳市指定有形文化財となる。
厨子とご神体弁財天像は現在、千歳神社に安置されており、レプリカが千歳市立図書館に展示されている。
- (12) 武藤勸蔵 寛政十(一七九八)年 『蝦夷日記』
- (13) 磯谷則吉 享和元(一八〇一)年 『蝦夷道中記』
- (14) 田草川伝次郎 文化四(一八〇七)年 『西蝦夷地日記』 中山利国編(昭和十九年・石原救龍堂)
- (15) 竹内甚左衛門 文化六(一八〇九)年 『西蝦夷地旅行日記』(津軽家文書)所載、人間文化研究機構国立国文学研究資料館所蔵)
- (16) 元文四(一七三九)年の樽前山大噴火により、積もった火山灰のこと。
- (17) 山田文右衛門が私費を投じて改修した道で「千歳越え」と呼ばれる。安政五年六月、千歳から勇払を越えた松浦武四郎は、戊午日誌の中に「東西新道」と記し、「右の方是より坂を七十八丁下るやヒベンコ本名ヘンケヒ」といへるよし 上の冷水の湧出る処と云り 此処に四尋も深き水湧壺一ツ有しと 其にて号しものよし。番屋一棟有 從ちトセ此処まで二里 先年より此道無しを山田文衛門といへる者 此処を切開、馬 牛 車の三つの通路をつけ、チトセ会所元の鮭を皆ユウフツ下げに致し候様に致せしもの也 此処より小舟にて凡そ四里にてユウフツ会所へ着す 余先年来たりし時は此処より船にて

下る也 然し当時其川すじ千せし致して 舟通りがなくなり 今は此処の番屋は廃せしとかや」と記す。

道筋は、千歳会所 ママツ ルウサン ヌブノシケ キサラコツ オホコツ ルイカウシコツ 追分 右へ行けばビビ、左へ行けばパンケビビで、かつての室蘭街道とほぼ同じ道筋となっている。

- (18) (17)に同じ。
- (19) 開拓使が「十年計画」を実施、経過して明治十五(一八八二)年二月に廃史するにあたり、同十七年に大蔵省が刊行した開拓使時代の地理・風俗・政治・外事・物産に関する事項。同書は、千歳改名の年次を寛政年間として誤記している。

- (20) 知里真志保「北海道駅名の起源」 佐々木利和編『アイヌ語地名資料集成』所収(昭和六十三年 草風館)
- (21) 山田秀三 昭和五十三(一九七八)年 『アイヌ語地名の研究3』
- (22) 昭和四十八(一九七三)年ころ、長見も参加した山三ふじや(株)の社長渡部茂、関亀三、林元一の三人が中心となり、地名も含めた千歳のアイヌ文化全般について古老たちから聞き取りを行った覚書のことを指し、刊行物ではない。
- (23) 長見義三 昭和五十一(一九七六)年 『ちとせ地名散歩』北海道新聞社
- (24) 榊原正文 平成十四(二〇〇二)年 『データベースアイヌ語地名3』石狩 『北海道出版企画センター』
- (25) 伊能忠敬 文政四(一八二二)年頃 『蝦夷国測量図』

あとがき

高知県春野町の望洋霊園を訪れたのは平成十七年だった。春といえまだ寒い三月のことであった。山間の細い道の先のさほど大きくない霊園に北代忠吉の墓がひっそりと佇んでいた。

明治二年、明治政府は各藩に半ば強制的に北海道の土地を割り当て開拓を命じた。夕張郡、勇払郡、千歳郡の分領支配を命じられたのは高知藩だった。

状況調査と支配地受取りのため来道したのが岸本田蔵と北代忠吉である。岸本らは、同年九月函館に到着し、調査を開始した。夕張郡に足を伸ばそうとしたのは十一月の末頃と思われ、調査が困難をきわめたことは従者の杉本安吾が病気に冒され勇払の地で客死していることにも伺われる。

開墾地の主点を千歳付近におき同三年、大工、人足、農夫など約六〇人が千歳に渡り、開墾にあたった。高知藩は一カ年の入費二万両を計上、千歳を中心に三カ所に大野村から取り寄せた稲苗を植え付けた。出水による流失や火山灰地のため思うような結果は出なかった。水難にあったアイヌ住民に救済米を与え撫育するなど心を砕いた施策を行っている。

高知藩は五年程の開拓計画を立てたが、開拓使が本道全土を画的に開拓を進めることになり、同五年五月、二カ年あまりの分領支配は幕を閉じる。

岸本はその後同十三年、網走郡の初代郡長に任命されている。岸本に同行した北代忠吉については、

人物やその動静については不明であった。

北代忠吉（のち正臣）は、文久元年八月、武市半平太が土佐藩を勤皇へ導いた土佐勤王党の血盟同士の一人だった。武市は藩政改革を進める吉田東洋らと対立したが東洋暗殺を果たし藩政を掌握していった。しかし、文久三年、前藩主山内容堂が国許に帰ると事情が変わり武市は切腹させられる。龍馬の養母、伊与は藩の御蔵役北代平助の三女である。北代家は坂本家と縁戚関係であった。

高知藩は鳥羽伏見以後の局面で有力な倒幕軍として登場し、官軍の尖兵として戦い抜くことになる。忠吉は戊辰戦争で振遠隊とともに新潟から秋田方面に転戦し、明治改元後新政府に出仕、外国官御用掛、外務大録。千歳に来たのはこの後のことと思われる。

弘前旧士族の給禄問題を円満に説得鎮撫した忠吉は、その功によって青森県令になった。しかし、佐賀の乱に参戦するため離任。乱後、内務省庶務局長となり、明治九年、明治天皇の東北巡幸に随行。二代目東京重罪裁判所長、農商務省参事官総務局課長、通信省書記官文書課長などを歴任し退官した。同四十年十一月二五日、病死。土佐藩縁の東京都品川区海晏寺に埋葬され、ついで昭和六十一年高知県吾川郡春野町治国谷峠西方の墓地に改葬された。

忠吉の千歳での生活はわずかなものであったが、維新聞もない千歳の地で開拓に情熱を傾けた青年がいたことを記憶にとどめてもよい。（編集子〇）

志古津 9 号

『新千歳市史』機関誌

平成二十一年三月二十七日発行

発行 千歳市

〒〇六六・八六八六

北海道千歳市東雲町二丁目

編集 千歳市総務部主幹

市史編さん担当

TEL 〇一三三（二四）〇五〇〇

印刷 千歳印刷株式会社

北海道千歳市錦町三丁目三番地

※本誌の内容は、千歳市ホームページでも見ることができます。

<http://www.city.chitose.hokkaido.jp>

メインページ→「教育と文化」→文化財・歴史